

国際帝国主義の侵略反革命・第三世界支配を粉碎し、全世界の帝国主義を打倒せよ／世界プロレタリア革命—世界プロレタリア独裁—共産主義を実現する新しいインターナショナル(世界単一党)を国際階級闘争の最前線に創建せよ！

各号の 内容	新年号第1論文P 4~8	1994年 1月1日 第462号 編集発行人 海路 薫 一部 400円		共産主義者同盟（全国委員会）
	新年号第2論文P14~22			
	94年アピールP 2~3			
	アジア共同行動報告P 9~13			



止場にむかう を組織しよう

ソ連の崩壊から二年。戦後最大規模の世界同時不況の嵐の中、われわれは一九九四年を迎えた。ソ連崩壊と同じ年の一九九一年に始まつた今回の世界同時不況は三年目に入つた。それは経済的には衰退過程にあるアメリカやイギリスなどはもとより、戦後、急速な経済成長を続けてきた日本、ドイツをもとらざる全世界の国々を巻き込みながら、いつ果てるとも知れぬ長期化の様相を深めている。全世界で失業と貧困が拡大し続け、労働者人民の困窮状況が拡大し続いている。そして他方では帝国主義は、この大不況をも利用して国際的な搾取を強め、世界の富をいつそう貪欲に独占しようとする動きを強めている。帝国主義諸国とそれぞのの多国籍資本は、全世界で市場の争奪と再分割をめぐる激しい抗争を展開しつつ、同時に第三世界諸国からの資源・労働力・富のいつそうの収奪によって、矛盾を対外転嫁し危機の乗り切りをはかるうとしている。

ソ連崩壊によって、米ソ両大国が世界各地で軍事的に対決をくり広げた「冷戦」の一時代は終結した。しかし、そのことによって国際政治の構図が根本から変化したわけではなかった。アメリカを中心とする帝国主義の側は世界支配を放棄したのでもなければ、強制や暴力によって彼らの意志を世界におしつけることを放棄したわけでもなかった。帝国主義の世界支配の野望は国連等を利用しながら形を変えて継続し、時にそれは以前よりもいつそう露骨な形であら

新年アピール

ソ連の崩壊から二年。戦後最大規模の世界同時不況の嵐の中、われわれは一九九四年を迎えた。ソ連崩壊と同じ年の一九九一年に始まつた今回の世界同時不況は三年目に入つた。それは経済的には衰退過程にあるアメリカやイギリスなどはもとより、戦後、急速な経済成長を続けてきた日本、ドイツをもとらざる全世界の国々を巻き込みながら、いつ果てるとも知れぬ長期化の様相を深めている。全世界で失業と貧困が拡大し続け、労働者人民の困窮状況が拡大し続いている。そして他方では帝国主義は、この大不況をも利用して国際的な搾取を強め、世界の富をいつそう貪欲に独占しようとする動きを強めている。帝国主義諸国とそれぞのの多国籍資本は、全世界で市場の争奪と再分割をめぐる激しい抗争を展開しつつ、同時に第三世界諸国からの資源・労働力・富のいつそうの収奪によって、矛盾を対外転嫁し危機の乗り切りをはかるうとしている。

ソ連崩壊から二年。現代世界はその基本的性格を何ら変えることはなかった。

われわれは依然として「過渡期世界」に存在している。すなわち歴史的な視野からみるとならば、現代世界は「資本主義から社会主義に向かう過渡期」の段階にある。

今世紀の初頭、資本主義はその最高の発展段階としての帝国主義に成長した。そして全世界において支配的生産様式となつた資本主義は、同時にその歴史的役割を終えつあることを示した。帝国主義段階の資本主義は、「死滅しつつある資本主義」(レーニン)となつた。以降、資本主義とそれががつくりだした世界は、ただブルジョアジーによって人為的に延命させられてきたにすぎない。

マルクス主義は資本主義の没落と共産主義の到来が不可避であることをプロレタリアートに明示したが、その第一歩は一九一七年のロシアにおける世界初の社会主義革命の勝利によって踏み出された。ロシア革命によって共産主義運動は国際的な規模で一気に高揚していった。それは資本主義諸国だけでなく植民地・従属国にまで広がり、文字通り国際的な運動として成長し続けた。しかしロシア革命を起点とする共産主義革命運動は世界革命の勝利をつかみとることなく、その後のスターリン主義による歪曲と支配をへて、今日の事態へと至つた。国際共産主義運動のいたんの敗北によって、資本主義世界は打倒されることなく消滅をまねがれて延命した。

ソ連崩壊後ブルジョアジーは、資本主義が共産主義との歴史的な競争において勝利したと主張し、資本主義が歴史上最良で最後の経済制度であるかのような宣伝をくり広げてきた。しかしながら誰にもはつきりし始めたのは、たとえ

われるようになつた。現在、帝国主義はソマリアやハイチに對して、またキューバや北朝鮮に對して、ほしいままの反革命介入・干渉戦略をくり広げている。

資本主義・帝国主義の本質が全世界でますますあらわになり、また各国の労働者人民に対する抑圧が強められていくなかで、全世界で労働者人民の新しい政治的動きも発生してきている。

今日、全体として全世界で、反資本主義・反帝主義者の活動すべき舞台は大きく広がりつつあるのである。

1

ソ連崩壊から二年。現実世界は資本主義自身にその役割がすでに終わつていてることを宣告している。すなわち、資本主義が資本主義自身にその役割がすでに終わつていてることを明らかにしている。また他方では、世界恐慌のつけが国内外の労働者人民に転嫁されるとともに、資本主義・ブルジョアジーと労働者人民とのあいだの矛盾はますますあい入れないものとなる。両者の階級的対立は拡大していく。階級矛盾と階級対立は国際的な規模で蓄積され続け、その結果、国際的な階級闘争の新しい条件も拡大していく。

これが世界の現実であり、遠くない将来の姿である。かくして社会主義への世界的な過渡期といふ現実世界の基本的性格は、ソ連の崩壊によつてあいまいになるどころか逆にますます鮮明なものとなつてゐる。

2

資本主義世界の行きづまりがはつきりとし、国際的な階級闘争の条件が拡大しつつあるにもかかわらず、ソ連崩壊後の世界に生きるプロレタリアートの前には、その前進をさまたげる大きな困難が横たわつてゐる。

今日、世界のプロレタリアートは、過去において革命ロシアやコミニテルンが、あるいは戦後ににおいては革命中国がその役割を果たしてきたような社会主義革命の根拠地というものをもつてはいない。どの国のプロレタリアートも外国からの多大な援助を期待することができない。彼らはかつてソ連によつて行われていた「ひもつき援助」すらあてにすることができない。彼

ソ連が存在しようがしまいが、あるいは共産主義運動が存在しようがしまいが、資本主義は自分の内部に存在する根本的な矛盾を決して克服できないという事実であった。今日進行する世界同時不況は、資本主義的生産様式が不可避免に生み出す過剰生産恐慌である。巨大な生産力が社会的なものになつてゐるにもかかわらず、生産手段と生産物は相変わらず私的に所有されてゐるという「資本主義の基本矛盾」(エンゲルス)を、資本主義世界は世界恐慌といふかたちで周期的に爆発させざるをえないということを、つづあるのである。

資本と生産の国際的な集中と集積が進み、多国籍企業と呼ばれる巨大独占資本が国際的に展開して世界経済を支配するというよう今日の世界においては、恐慌は一国の枠を越えて世界的大な規模で発生する傾向を強める。そしてその分だけ恐慌が社会と世界に与える打撃は、過去の時代よりももっと大規模になり、もっと破壊的な規模で発生する傾向を強める。そしてそののである。

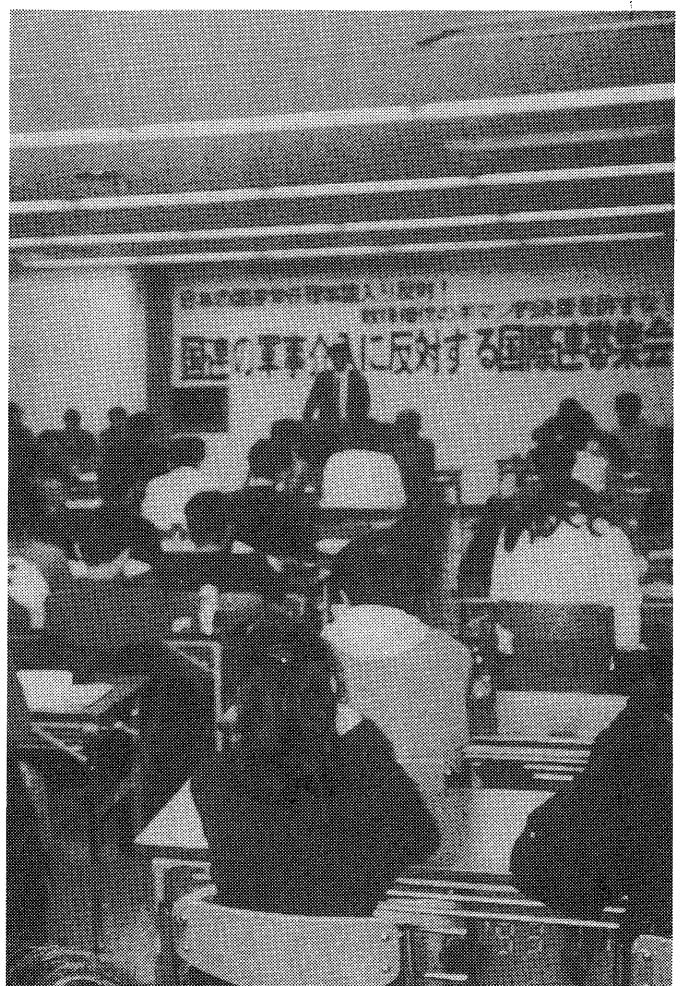
ジーとその背後に存在する国際的に結合した帝国主義との闘争に立ち上がるをえない。これは各国の階級闘争にとって、またそれらが共産主義運動と結びつく上で、きわめて大きな有形・無形の重圧となっている。

もっと大きな困難は、共産主義が人民のあいだで権威と信頼を失っていることにある。共産主義とは資本主義よりも遅れたソ連社会の現実であり、共産主義とは自由や民主主義を抑圧するスターリン主義のことであるという「常識」を、レーニン死後の世界においてプロレタリアートは吹き込まれ続けてきた。他方、ソ連の現実を批判し、スターリン主義を批判し続けてきた革命的共産主義者の側は、これを別の現実をもつてくつがえすことができなかつた。ソ連が崩壊し、スターリン主義が破産を明確にし、ソ連なき世界に残つた社会主義国の中華人民共和国の「資本主義化」路線に深くのめりこんでいくなかで、共産主義運動の権威の崩壊は決定的になつた。多くの人民が共産主義から離反し始めた別の理想、別のイデオロギーに自らのよりどころを求めるようになつた。反帝国主義運動や反体制運動の指導理念・統合イデオロギーとして、第三世界においては民族主義や宗教が共産主義に代わって台頭し、資本主義諸国においてはマルクス主義からの離脱を説く社会改良主義的な種々の「現代思想」が一定の影響力をもち始めできている。

さらに指摘すべき困難は、ソ連崩壊後、各国でスターリン主義共産党の消滅や凋落、社民化が進むなかで、プロレタリアートのもともと重要な武器である前衛党建設に対する逆風と十字砲火が強まっていることである。前衛党建設そのものが諸悪の根源であるかのように

らは孤立・無援を覚悟して、自国のブルジョアジーとその背後に存在する国際的に結合した帝國主義との闘争に立ち上がるをえない。これは各国の階級闘争にとって、またそれらが共産主義運動と結びつく上で、きわめて大きな有形・無形の重圧となっている。

過渡期世界の 国際的な運動



大きな成功おさめた国際シンポジウム(11月23日・東京)

宣伝され、「共産主義党」「プロレタリア党」「中央集権党」「非合法党」に対する非難の声が強まり、前衛党を建設しようとする実践に対し四方八方からの攻撃が襲いかかっている。こうした困難を克服するためには、長い時間と膨大な努力をするだろう。しかしプロレタリアートは必ず困難に立ちかゝる、過渡期世界の止揚—資本主義の世界的廃絶をめざす運動を再構築し始めるであろう。そしてそれは、われわれの考えるところ、プロレタリアートの国際的な共同の運動としてのみ成立し発展する。

ソ連の崩壊以降、共産主義運動に対する帝国主義の攻撃が激化するなかで、さまざまな経緯と思想的傾向をもつ共産主義者・共産党が、世界のあちこちで自然成長的な結合を開始し始めた。それは、たとえばスターリン主義に対する批判的態度を明確にしていないなど重要ないくつかの点において大きな限界をはらむものはあるが、ソ連崩壊後の世界において共産主義者の国際的な団結を再建しようとする積極的因素を内包しているという点で注目されなければならない。われわれ日本の共産主義者もまた、開始された共産主義運動をめぐるこれらの新しい動きに能動的に関わっていく必要がある。それは現代世界国際共産主義者の一員としてのわれわれの義務である。そしてまたそれは、われわれが我が階級的諸運動のなかにインター組織する、という基本構造をもつ運動であった。それは国際的な友好一般や連帶一般とは明確に異なるものであった。

共産主義者の国際的団結が重要視され、また前提視されたのは、共産主義運動はその本質において世界革命をめざす運動、一国のブルジョアジーだけでなく、全世界のブルジョアジーの掃討をめざす運動であるという正しいマルクス主義的な路線がその基礎に存在していたからである。しかし、この路線に真向から対立するスターリン主義の一国社会主義路線が世界の共産主義運動を支配するなかで、世界革命を展望する共産主義者の国際的結合は否定されてしまつた。一国社会主義路線は世界党としてのコミニテルンの解散を招き、各國の党に一国的孤立を強要した。

われわれは現代の共産主義者として、何よりも次のような任務に全力を傾けねばならない。すなわち、①スターリン主義によって否定され

た世界革命路線を復権し、②各國共産主義運動の一国的基盤と枠組みを解体し、③共産主義運動を本来の国際的基盤の上にすえ直して共産主義者の新しい国際的結合を組織していくこと、これである。

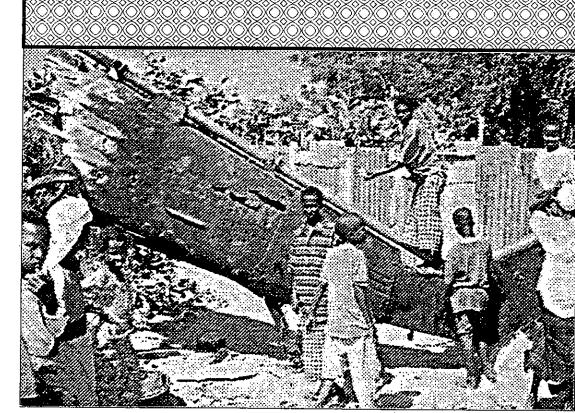
ソ連の崩壊以降、共産主義運動に対する帝国主義の攻撃が激化するなかで、さまざまな経緯と思想的傾向をもつ共産主義者・共産党が、世界のあちこちで自然成長的な結合を開始し始めた。それは、たとえばスターリン主義に対する批判的態度を明確にしていないなど重要ないくつかの点において大きな限界をはらむものはあるが、ソ連崩壊後の世界において共産主義者の国際的な団結を再建しようとする積極的因素を内包しているという点で注目されなければならない。われわれ日本の共産主義者もまた、開始された共産主義運動をめぐるこれらの新しい動きに能動的に関わっていく必要がある。それは現代世界国際共産主義者の一員としてのわれわれの義務である。そしてまたそれは、われわれが我が階級的諸運動のなかにインター組織する、という基本構造をもつ運動であった。それは国際的な友好一般や連帶一般とは明確に異なるものであった。

われわれは自国の階級闘争の組織化において責任を果たしつつ、共産主義運動の国際的な再建に向けて、全世界の原則的共産主義者たちとの共同のたたかいを大胆に推進していく決意である。レーニン死後七〇年目の一九九四年を、共産主義者の大胆な挑戦と断固たる進撃の年としてたたかいところ。

「国際帝国主義の侵略反革命・第三世界支配を粉碎し、全世界の帝国主義を打倒せよ・世界プロレタリア革命・世界プロレタリア独裁・共産主義を実現する新しいインター・ナショナル（世界単一党）を国際階級闘争の最前線に創建せよ！」この総路線スローガンのもと一九九四年の階級闘争と党建設戦をたたかぬこう。

●新年号第一論文

破たんする資本主義の
前方に何を見るべきか



ソマリアで撃墜された米軍ヘリコプター(93・10)

資本主義もまた人間の歴史は現れた経済的社會構成体の一端であり、それは全面的に發展したあとには必ず消滅の過程に入る。現在われわれが一〇世紀末の世界に目撃しているのはそのような過程の一現象であり一局面である。

いる。それは過去のどの時期よりも深刻で大規模なものである。ソ連の消滅はこの世界の性格をより鮮明なものにした。ソ連が消滅することによって世界の様相はこゝか大きくなり、変化へ、一見復讐ばかりの

になつた。しかし逆に世界の本質、すなわち資本主義とブルジョアジーが世界の富を独占し、圧倒的多数の世界の人民を搾取し支配しているという資本主義世界の本質は、その様相の複雑さにもかかわらず逆にますます明解なものになつてきている。そして、今日の世界に生み出されるさまざまな矛盾の主原因是資本主義以外にならぬものが、誰にも否定できないほど明確なものになりつつある。

ソ連の崩壊によって世界はロシア革命以前の時代にまで後もどりしたと言われる。資本主義世界の本質がいつそうあらわになつたといふ意味では、それは真実の一部を指摘してはいる。しかしそのすべてではない。世界は一九一七年以前の時代に単純に回帰したのではない。二〇世紀末、資本主義は急速な技術革新、膨大な資本蓄積、そして世界の富と市場の全面的な支配によつてマルクスの時代はも

とより、レーニンの時代をもはるかに超える巨的な生産力をつくりだした。これによって、各国経済の相互依存関係は過去のどの時代にもみられないほど強まり、世界経済は国民経済の垣根をとりはらいながら一つの有機体のように一体化した。さらに資本主義の発展は近代プロレタリアートを全世界で飛躍的に増加させた。そしてそれは、世界のプロレタリアートが国際的に結合し、資本主義に対する共同の闘争を組織していく基盤をいつそう強化した。

マルクスの『経済学批判・序言』（一八五九年）の次のテーゼは、ブルジョア御用学者たちが言うような「破産した予言」ではなく、今日の世界とそのゆくえを正確に見通すための現代に生きるプロレタリアートの思想的武器である。「社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係と、あるいはその法律的表現にすぎないが、所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのときには社会革命の時期が始まる。経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、あるいは激速に変革される」。資本主義が新しい経済的社会構成体である共産主義と世界的な規模で交代していく諸条件は、今日の時代においてますます成熟していっている。それは現代の世界でどのようにあらわれているのか。この点について以下みてみよう。

存立基盤ゆるがす矛盾

うな状況は、今回の世界同時不況をいつそう大規模で深刻なものにしている。

しかし、これらは資本主義世界の行きづまりと破たんを示す氷山の一角にすぎない。資本主義経済こそ世界の命脈よつまつたら、過度の貿易保護主義は世界経済の発展を阻害する要因となる。

資本主義世界の行きつまると破たんは、今日、資本主義諸国をおおう戦後最大規模の世界同時不況という形で現象している。九一年に米・日・独を含む主要資本主義国は軒並み成長率の低下を記録し、いっせいに景気後退局面に突入した。九二年にはアメリカの経済成長率は前年九一年のマイナス一・一%から一向いて一・一%となつたが、O E C D (経済協力開発機構) 加盟国全体の成長率は前年の一・〇%からわずかに一・六%に上昇したにとどまり、ドイツの成長率は三・一%から一・〇%に、日本は四%から一・三%に低下した。昨年九月、I M F (国際通貨基金) は九三年の世界経済見通しを発表したが、

そこでは同年四月時点での予測が軒並み下方修正され、九三年には日本、ドイツ、フランスはマイナス成長に陥るとされた。

七〇年代の第一次石油危機にも匹敵する今回 の世界同時不況の大きな特徴点の一つは、八九年から一年にかけて資本主義世界に統合され 市場経済への移行＝資本主義化を進めた旧ソ連・ 東欧圏において、インフレー物価高騰とともに 大きな経済危機が生まれたことである。旧ソ連 地域で九二年の成長率はマイナス一八・二%と 予測され（IMFの推計）、旧東欧諸国でも九 一年の旧東ドイツのマイナス三・四%をはじ め九〇年から九二年にかけて経済成長の大幅な

義経済に景気の循環はつきものであり、過剰生産にもとづく不況期は、それが資本主義の崩壊とプロレタリアートの社会革命の始まりでないかぎり次の好況期の準備段階となる。だから循環的不況が資本主義的生産様式には避けることができない、この生産様式特有の現象であったとしても、不況一般が資本主義の本質的な行きづまりを示すものではない。われわれは、資本主義世界が現在どれほどひどい景気後退にみまわっているのかということにのみ目を奪われてはならない。もっと重要なのは、現在の経済のグローバル化、ボーダレス化といわれる資本主義の「最終段階の」発展のなかで、資本主義固

有の矛盾がますます世界的なものとなり、資本主義自身にとってその存立を脅かすようになるまでに巨大化し深刻化しているという現実を把握することである。現代の世界で進行する次のような諸問題をとらえておくことは、この面でとくに重要である。

まず、近年急速に拡大している対外直接投資が、資本主義世界経済に与え続けている巨大な影響についてとりあげなければならない。帝国主義段階においてこの問題に初めて本格的に論及したのはレーニンであった。レーニンは一九一六年執筆の『帝国主義論』において「自由競争が完全に支配する古い資本主義にとっては、商品の輸出が典型的であった。だが独占体の支配する最新の資本主義にとっては、資本の輸出が典型的となつた」とし、「商品の輸出とは異なる資本の輸出がとくに重要な意義を獲得しつつある」ことを強調した。レーニンの時代、二〇世紀初頭に「典型的」となった「資本の輸出」はその後、より大きな規模で行われるようになり、第一次世界大戦後、イギリスに代わるベルギー国家として台頭した米国を中心にして本格化していく。さらに七〇年代に入るとアメリカと並んで、西ドイツ、日本、フランス、イギリスなども活発な投資を展開し始め、対外直接投資におけるアメリカのシェアは六〇%前後から、八〇年代には三〇%前後へと減少していく。しかし全体としてはこのかん先進資本主義諸国による投資総額は激増し、一九七〇年の一〇億SDR（注・SDRとはIMFの特別引き出し権であり、一種の国際通貨としての機能をもっている）から八六年には七八八億SDRと約六倍になつた。また投資の内容も、石油など天然資源開発を中心としたものから、製造業、商業、金融などの分野にも拡大し、第三世界向け投資も製造業を中心にして大幅に増加していく。この過程を通じて資本主義諸国の大企業は世界に複数の生産拠点をもつ多国籍企業へと変貌し、多国籍企業は世界経済の動向を左右するまでになつた。

ここで注目しておるべきことは、主要資本主義国の対外直接投資の拡大が、一般にそれらの国内の利潤率の傾向的低下や、労働生産性の伸びの低下と並行して進んだことである。利潤率の低下についていえば、アメリカを例にみると一九四八年から五〇年にかけて平均一六・一%であった利潤率は、七三年には一〇・五%にまで低下した。労働生産性の伸びについていえば、OECD平均で一九七三年以前には年平均一・八%であったものが、七九年から八六年の平均で〇・六%にまで低下した。要するに、「資本主義的生産の直接的目的および規定的動機は剩余価値の生産である」とマルクスによって指摘されたように、国内での利潤率の低下や、同じことではあるが労働生産性の緩慢な伸びを補うために、また国内では得られない超過利潤を獲

得するために各国の独占資本は対外投資を先をあらそつて進めていったということをこれは示している。

対外直接投資の拡大にともなって資本輸出国の側では、米国に典型的に示されたような国内産業の空洞化という事態が生みだされていった。より高い利潤をあげるために工場等が海外に移転され、そこで生産された商品も海外でますます多く販売されるようになる。多国籍企業の成長は本国の産業や経済との結びつきをますます弱め、やがてはその停滞を引き起こしていくといふような傾向が強まってゆく。一九八二年に米国の経済誌「フォーチュン」が発表した世界上位企業約八〇〇社の海外生産比率の平均は二八・一%、同じく海外販売比率の平均は二二%に達した。アメリカ企業では、海外売上の八割以上は海外での生産によるものである。

また、国内で技術革新、生産過程の合理化、産業構造の再編などが進んで「資本の有機的構成」が高度化し、他方で対外直接投資が大きく伸びるなかで、先進資本主義諸国では失業者が増加し、失業問題が構造的なものとなつていった。欧米諸国、日本で失業率は傾向的な増加を示し続けている。たとえば米国では一九六四年から六七年の平均失業率は四・二%であったが、八〇年から八七年にかけてのそれは七・六%に増大した。同様に、西ドイツでは〇・六%から六・〇%へ、イギリスでは一・五%から一〇・五%へ、フランスでは一・七%から八・九%へと大幅に増加した。日本でも一・二%から一・五%へと約二倍になつていている。日本の失業率が

歐米諸国に比べて低いのは日本の統計の基準が歐米と異なるのが一因であるが、同時にそれは対外資本進出のレベルの違いを反映したものである。九一年における製造業の海外生産比率は米国で約二五%、ドイツで約一〇%であるが、日本のそれは七%程度である。欧米諸国では対外直接投資の増加は、国内の失業問題を構造化させ、ブルジョアジーの政治支配を不安定なものにしているが、日本もまたその後を何周連れかで追いかけているのである。

階級対立の国際的拡大

対外直接投資とともに現代の世界経済に大きな影響を与える、資本主義の矛盾をいつそう激化させているものとして、巨大化した金融資本の国際的展開がある。金融・為替の規制緩和や自由化が世界的な規模で進められ、金融市场の世界的な統合がはかられていた八〇年代、国際金融資本は以前にもましてますます活発な活動をくり広げるようになった。このなかで為替取引や株式・債券の売買が急速に増大し、商品貿易の決済に必要な金額の数十倍もの何百兆ドル

さらに「資本の輸出」としての対外直接投資は、「商品の輸出」としての貿易よりもはるかに直接的に、世界とくに第三世界の経済と社会に大きな影響をもたらしている。対外直接投資とくに製造業資本の投資は、第三世界を含む全世界に資本主義的生産様式を移植し、資本主義的生産関係をつくりだし、従属的性格をもつものではあるが資本主義の発展を各地で促進する。ブルジョアジーが生み出され、多国籍企業資本と各国のブルジョアジーによる経済支配のもとで膨大な人民が搾取される構造がつくられるとともに、一方では「資本主義の墓掘り人」としての近代的プロレタリアートの数も増加していく。たとえばアジアのいくつかの地域に例をとつても、一方では「資本主義の墓掘り人」として就業別人口構成の推移をみると、韓国では製造業の就業者は一九六一年に就業者全体の四・五%を占めるにすぎなかつたが、その割合は八九年には二七・六%にまで増加した。台湾では二一%（六〇年）から四二%（八九年）へ、タイでも同じ時期に四%から一七%へと大きく増加した。第三世界などにおいて増加した賃金労働者の少なくない部分は、外国資本によって直接雇用されている。現在、世界のトップレベルの多国籍企業にあっては、海外雇用比率は五〇%を超えている。遅れて世界に進出した日本企業においても、海外で雇用する従業員総数は約三三六万人、北米・欧州以外の地域では約一四七万人（うち製造業一一三万人）に達している（九一年末）。

資本主義的発展の途上にある国々では、マルクスやエンゲルスが一九世紀のイギリスの状況を通して描いたような労働者階級に対するむきだしの搾取が、多国籍企業や地元資本によって例外なく行われている。劣悪な労働環境、長時間にわたる単純作業、婦人や児童労働の搾取、そして無権利と低賃金…。こうして資本の輸出は、輸出先の国にプロレタリアートを増加させただけでなく、同時に資本と資本労働の非和解的な関係をも移植し拡大させていく。

さるに「資本の輸出」としての対外直接投資は、「商品の輸出」としての貿易よりもはるかに直接的に、世界とくに第三世界の経済と社会に大きな影響をもたらしている。対外直接投資とくに製造業資本の投資は、第三世界を含む全世界に資本主義的生産様式を移植し、資本主義的生産関係をつくりだし、従属的性格をもつものではあるが資本主義の発展を各地で促進する。ブルジョアジーが生み出され、多国籍企業資本と各国のブルジョアジーによる経済支配のもとで膨大な人民が搾取される構造がつくられるとともに、一方では「資本主義の墓掘り人」としての近代的プロレタリアートの数も増加していく。たとえばアジアのいくつかの地域に例をとつても、一方では「資本主義の墓掘り人」として就業別人口構成の推移をみると、韓国では製造業の就業者は一九六一年に就業者全体の四・五%を占めるにすぎなかつたが、その割合は八九年には二七・六%にまで増加した。台湾では二一%（六〇年）から四二%（八九年）へ、タイでも同じ時期に四%から一七%へと大きく増加した。第三世界などにおいて増加した賃金労働者の少なくない部分は、外国資本によって直接雇用されている。現在、世界のトップレベルの多国籍企業にあっては、海外雇用比率は五〇%を超えている。遅れて世界に進出した日本企業においても、海外で雇用する従業員総数は約三三六万人、北米・欧州以外の地域では約一四七万人（うち製造業一一三万人）に達している（九一年末）。

資本主義的発展の途上にある国々では、マルクスやエンゲルスが一九世紀のイギリスの状況を通して描いたような労働者階級に対するむきだしの搾取が、多国籍企業や地元資本によって例外なく行われている。劣悪な労働環境、長時間にわたる単純作業、婦人や児童労働の搾取、そして無権利と低賃金…。こうして資本の輸出は、輸出先の国にプロレタリアートを増加させただけでなく、同時に資本と資本労働の非和解的な関係をも移植し拡大させていく。

さるに「資本の輸出」としての対外直接投資は、「商品の輸出」としての貿易よりもはるかに直接的に、世界とくに第三世界の経済と社会に大きな影響をもたらしている。対外直接投資とくに製造業資本の投資は、第三世界を含む全世界に資本主義的生産様式を移植し、資本主義的生産関係をつくりだし、従属的性格をもつものではあるが資本主義の発展を各地で促進する。ブルジョアジーが生み出され、多国籍企業資本と各国のブルジョアジーによる経済支配のもとで膨大な人民が搾取される構造がつくられるとともに、一方では「資本主義の墓掘り人」としての近代的プロレタリアートの数も増加していく。たとえばアジアのいくつかの地域に例をとつても、一方では「資本主義の墓掘り人」として就業別人口構成の推移をみると、韓国では製造業の就業者は一九六一年に就業者全体の四・五%を占めるにすぎなかつたが、その割合は八九年には二七・六%にまで増加した。台湾では二一%（六〇年）から四二%（八九年）へ、タイでも同じ時期に四%から一七%へと大きく増加した。第三世界などにおいて増加した賃金労働者の少なくない部分は、外国資本によって直接雇用されている。現在、世界のトップレベルの多国籍企業にあっては、海外雇用比率は五〇%を超えている。遅れて世界に進出した日本企業においても、海外で雇用する従業員総数は約三三六万人、北米・欧州以外の地域では約一四七万人（うち製造業一一三万人）に達している（九一年末）。

資本主義的発展の途上にある国々では、マルクスやエンゲルスが一九世紀のイギリスの状況を通して描いたような労働者階級に対するむきだしの搾取が、多国籍企業や地元資本によって例外なく行われている。劣悪な労働環境、長時間にわたる単純作業、婦人や児童労働の搾取、そして無権利と低賃金…。こうして資本の輸出は、輸出先の国にプロレタリアートを増加させただけでなく、同時に資本と資本労働の非和解的な関係をも移植し拡大させていく。

九〇年までの約四年間にわたりバブル経済という異常な好況期が現出したが、それはまた九年からの株価・地価の暴落という同じ要因を引き金にして崩壊し、現在の不況が始まっているのである。国際金融資本の大規模な展開は、一方では世界経済の相互依存性をますます強めるとともに、他方では実体経済に対して攢乱的・破壊的作用をおよぼし、そうすることによって資本主義の矛盾をますます拡大するという役割を果たしている。

ここまでわれわれは、現代の資本主義が多国籍企業や巨大銀行等の国際的な展開を通じて世界経済の統合を急速におし進めるが、それは同時に新しい矛盾を国際的な規模でつくりだすということを確認してきた。さらにここで「グローバリズムとナショナリズムの対立」といわれる問題をつけ加えておかねばならない。

各国の多国籍企業や巨大銀行は今日、より高い利潤を獲得するため経済的障壁の撤廃、経済のボーダレス化を要求し、投資の自由化、関税の撤廃、規制の緩和などをますます強く要求するようになってきている。たとえば現在、EC統合やNAFTA（北米自由貿易協定）、PEC（アジア太平洋経済協力会議）など経済の地域的統合の動きが急速に進んでいるが、その根底には国境の枠を越えて新たな市場・資源・労働力を求める、あるいは投機の場所や機会を求めて動き回る先進資本主義諸国の多国籍企業と巨大銀行のあくなき利益追求の欲望が存在している。それはちょうど封建制の末期に、日々成長し続ける商品経済と生まれたばかりのブルジョアジーが、彼らの利益と成長にとって阻害物となる散在する小市場の統合を要求し、地域ごとに異なる社会・経済・法律制度に代えて单一のそれを要求したという歴史的事実にも似ている。資本主義時代の末期にブルジョアジーは文字通り世界を舞台にして、資本の自由な運動を阻害する世界のあらゆる経済的障壁を取り払うという一大事業に取り組んでいるのである。

しかしここには彼らには越えられない大きな問題が存在している。多国籍企業といおうと世界企業といおうと、それらはたとえば米国の大国籍企業、フランスの多国籍企業というように、本国をもち、ある特定の民族国家と結びついた存在である。EC統合に見られるように民族国家は克服されつつあるという声もある。だがECが仮に政治統合にまで進むことに成功したとしても、できあがる国家は「ヨーロッパ民族国家」であり、民族国家としての性格を変えるものではない。民族国家に統合された多国籍企業は、各民族国家の利害から完全に自由になることはできない。むしろ多国籍企業は民族国家を最大限利用しようとする。多国籍企業は各民族国家の政策決定に大きな影響を与え、それらを通じて世界のなかでより優位な位置を確保しようと/or>するのである。

これまでわれわれが現実に見ているのは、経済のグローバル化が急速に進展する他方では各資本主義の間の利害対立が拡大し激化しているという事態である。すなわち帝国主義間対立の激化であり、最終的には世界の領土的分割にまで行きつくところの帝国主義間市場再分割戦の激化という事態である。資本主義のグローバリズムは決してナショナリズムを克服も止揚もできない。逆に「グローバリズムとナショナリズムの対立」は今後もますます拡大せざるえない。

しかし、グローバリズムの進展は歴史にとって大きな進歩である。なぜなら、国境を越えてますます多くの人々の共同労働によって生産が

越えられない大きな壁

世界経済の一体化・統合化が進むことによつて資本主義的諸矛盾はますます拡大していくが、それらは世界のプロレタリアート・被抑圧人民の肩にますます重くのしかかるようになる。資本の蓄積と生産力の発展が急速に進む他方では、世界的な規模で資本主義的貧困が拡大し、資本主義的窮屈化が進んでいく。

欧米社会での貧困の拡大についてはすでに素描した。生活水準の低下や失業の増加、青年層の絶望感の広がりのなかで、西欧ではネオ・ナチをはじめとする極右ファシズム勢力がドイツ、イタリア、フランスなどで台頭し、議会での議席をも伸長させてきている。EC諸国の中間層は六・二%減少)、貧富の差が広がり、貧困層が増大し続けている。米商務省の発表によれば、四人家族で年収一万四三五ドル(約一五〇万円)以下など、貧困とみなされる人口は九二年に過去三〇年で最高の三六九〇万人(全人口の一四五%、前年比一二〇万人増)に達した。

旧ソ連・東欧諸国でも失業やインフレが猛威をふるっている。ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ブルガリアでは失業率は一けたに達し(九三年)、ルーマニアで二〇〇%、ブルガリアで八〇%をはじめ各国で高いインフレが続いている(九二年)。「東欧の経済優等生」といわれたハンガリーでは国民の三〇%が困窮生活に陥ったといわれ、またロシアでも国民の三人に一人が最低生活以下にあると政府は発表している(九三年)。これらは各国の資本主義化の帰結であり、また欧米での恐慌の波及の結果である。

より深刻な貧困と窮乏は、第三世界のなかにつくりだされ続けている。一握りの先進

世界で資本蓄積が大規模に進むと同時に、貧富の二極分解が世界的なスケールで急速に進行している。第三世界の貧困は、資本主義の恩恵にまだあずかっていない「開発途上国」の資本主義的発展の遅れゆえの貧困では決してない。それは資本主義による長い過酷な植民地支配、第二次大戦後の資本主義による貿易や直接投資や金融的手段を通じた搾取、援助に名を借りたさらなる収奪によって、すなわち資本主義の世界的な「発展」の結果生みだされた貧困である。第三世界の貧困こそ資本主義が現代の世界につくりだした最大の矛盾である。

第三世界での貧困は、その日の食べ物にも事欠くという絶対的貧困を含む。世界銀行の発表ですら「絶対的貧困層」とみなされる人口は八九年には二二億人、世界の人口の二三%にも達している。これは八〇年に比べると二一五億人の増加である。八九年にFAO(国連食糧農業機関)は途上国では毎年一三〇〇万人から一五〇〇万人が飢え死にしていると発表している。いま一つの深刻な事態は、第三世界の八〇年代が「失われた一〇年」と呼ばれたように、第三世界の状況は改善されるどころか悪化し続けていることにある。たとえば八〇年代末に国連が作成した「一〇〇〇年の世界」という報告書は、「拡大する生産力格差」として次のような予測を示している。「大半の途上国では、一九八〇年代に入つて長期成長ペースの落ち込みが続いた。アフリカ、西アジア、中南米とカリブ海諸国では、一九八二年以降に経済の落ち込みが加速され、一九九〇年における労働力人口一あたりの生産高水準はこれらすべての地域で一九八〇年の水準を下回るものと予想されている。サハラ以南のアフリカの場合は、一九九〇年における労働力一人あたりの平均生産高水準が、一九七〇年代当時の水準をも下回るものと見込まれる」。アフリカでの状況の悪化はすさまじい。「アフリカは貧しくなった」と題する

行われ、世界的な規模で生産の社会化が進むにとかかわらず、この社会的生産によって生みだされた大量の生産物は、ごく限られた国々のさうに一握りの生産手段の所有者によって私的に取得されるという矛盾、つまりは資本主義的生産様式のもとでは避けられない「社会的生産と資本主義的取得との矛盾」が、資本主義的グローバル化のもとでその最大限まで拡大していくからである。そしてそれに付れて、歴史の進歩にとってもはや足かせとなつた現在の資本主義的取得形態を廃棄する諸条件がますます成熟していくからである。

朝日新聞の社説（九三年一〇月四日付）は、貧困の真の原因をおおい隠したうえではあるが、次のようにアフリカの貧困の一端について述べている。「世界銀行は購買力で為替を換算し、新たに貧困層に転落し、一〇〇〇〇年には三億人以上達する」「アフリカは三〇年前は食料を輸出していたし、一九七〇年までは自給できた。しかし：四人のうち三人までが農業に従事しているというのに、今では輸入や援助に頼らざるを得ない」。

第三世界の経済状況の悪化に、環境破壊問題が追い打ちをかけている。人民の生活条件を徹底的に奪いつぶしている環境破壊問題は、資本主義的生産の無政府性、その本質的な浪費性、そして資本主義とブルジョアジーによる第三世界諸国人民に対する無制限の国際的搾取によってつくりだされ、彼らにおしつけられているものである。

出口のない苦境に加えて第三世界には現在、

世界支配の強化を援護

こうした状況を受けて、いまなお世界最大の軍事・政治ヘゲモニーをもつ米国において、かつての植民地支配が被支配國の人々にとって大きな利益をもたらしたとするような植民地支配美化論など排外主義的な主張が台頭するなど、帝国主義による露骨な世界支配の強化に大義名分を与える、これを後押しするような思潮が全体として高まっている。

クリントン政権のブレーンの一人といわれるハンチントン・ハーバード教授が昨年九三年に発表し、わが国でも少なくない反響を呼んだ『文明の衝突』という論文はその代表的なもの一つであった。それはまた米国支配階級が現在の世界において何を脅威と感じているのかの一端を明らかにした。この論文の要旨は次のようになる。今後の世界の主要な文明とは、文明対非西欧文明という構図によって規定されるようになる。今後の世界の主要な文明とは、西欧文明、儒教文明、日本文明、イスラム文明、ヒンズー文明、スラブ文明、ラテン・アメリカ文明、アフリカ文明である。西欧文明は現在絶頂期にあるが、一方では非西欧文明の台頭に直面している。今後、世界大戦が起きるとすればそれは異文明間の戦争という形態をとるであろう。儒教・イスラム・コネクションが形成されつつあり、当面のあいだ、紛争の中核は、西欧

世界同時不況の大波がおし寄せてきている。資本主義とブルジョアジーはその本国内で不況・恐慌のつけを労働者人民に転嫁していく。その労働強化や生活苦を強制するのと同様に、そしてそれを上回る激しさで第三世界諸国の人々にその矛盾をおしつけながら事態を乗り切ろうとしている。長引く世界不況のなかで、九〇年末に一兆三四〇〇億ドルにも達した第三世界の累積債務問題が再び深刻化することが予想される。九〇年には第三世界全体の全債務返済額は一四〇億ドルにものぼったが、それは第三世界が受け取る「援助」額の約三倍に相当するものであり、このような国際的搾取の構造は世界同時不況のなかでますます強められていっている。

世界的な規模の貧困と窮屈の拡大は、国際的な階級対立、すなわちブルジョアジーとプロレタリアートとの国際的対立の拡大を準備する。資本主義・帝国主義による搾取の強化、矛盾のおしつけ、支配の強化に對して、被抑圧人民のさまざまな抵抗が全世界で吹き出している。そしてそれらは總体として帝国主義の世界支配に対するますます大きな脅威に成長しつつある。

対イスラム・儒教諸国という構図で展開するだろう。これに対する現実的対応策を探ることが必要だ…。

現代世界を経済的対立でとらえることさえ拒否し、「文明上の対立」という超観念的な立場からとらえるこの論文が世界的に大きな注目を集めたのは、これが米国支配階級の冷戦後の世界に対する強い不安感とその裏返しとしての支配欲とを、いわば新しい黄禍論をもって強烈に表現したからである。非西欧文明とはここでは、日本などを除外すれば資本主義によって支配される世界の圧倒的大部分を意味する。西欧によって支配され続けてきた第三世界の側からの反乱や反抗が高まっていることに警鐘を鳴らし、「同種の文明国家による連帯」としての西欧（資本主義）諸国結束が死活的な意味をもつていることを、文明論にまぶしてこの論文は提起しているのである。

そしてハンチントンは次のように言う。「国連の安保理、あるいはIMFの決定は、実際にMFやその他の国際経済機構を通じて、自らの経済利益を促進し、自らが妥当と考える経済政策を他の諸国に強要している」と。もちろん彼はそれが悪いと言っているのではない。彼はこれを当然のこととして是認するばかりでなく、

国連や諸国際機関を利用して第三世界に対する帝國主義諸国共同の介入や支配をさらに強めようとしているのである。

帝国主義的権益を防衛するための排外主義的イデオロギーが高まりをみせる一方、他方では、資本主義自身がその根本的な矛盾を克服して別の新しい社会を準備するというような、新手の資本主義擁護論も生まれてきている。米国の著名な社会学者であるドラッカーによつて九二年に書かれた『ポスト資本主義社会』はその代表的著作の一つである。

ドラッカーはこの著において、数百年に一度の大きな転換期を世界はいま迎えており、社会主義でも資本主義でもない「知識社会」というポスト資本主義社会が生まれようとしているとしたうえで次ののような主張を展開している。

「今日、イデオロギーとしてのマルクス主義を破壊し、社会システムとしての共産主義をしたのと同じ力が、資本主義をも老化させつつある。…今、資本主義とマルクス主義のいずれもが、急速に、極めて異質な新しい社会にとつて代わられつつある。その新しい社会、すでに到来しているその社会がポスト資本主義社会である」「現実の問題として、新しい『社会』が非社会主義社会であり、かつポスト資本主義社会であることはたしかである。そのような社会では、主たる資源が知識であることもたしかである」「現実に支配力をもつ資源、最終決定を下しする『生産要素』は、今日、資本でも、土地でも、労働でもない。それは知識（である）」「ポスト資本主義社会における支配的な諸階級は、資本家やプロレタリアに代わって、『知識労働者』と『サービス労働者』である」。

資本主義が大きな行き詰まりを示していることを承認したうえで、資本主義が何か別のものに変化しつつあるというドラッカーのこのような主張は、一面において、八九年以来、米国を中心とした発信基地として全世界で大規模に流布され続けてきた「資本主義勝利論」の破産をとりつくろおうとするものである。資本主義勝利論の代表的著作であり、「リベラルな民主主義」が勝利することによって歴史の進歩はもはやありえなくなつたとしたのは、フランス・フクヤマの『歴史の終わり』（八九年執筆）であったが、ドラッカーはこれを批判して、終わったのは「一つの歴史」にすぎないと述べている。それは単純な資本主義勝利論ではないし、通用しないというブルジョア思想界内部からの批判である。

単純資本主義勝利論とは異なつてドラッカーは、資本主義は永遠に続くどころか、すでに死滅しつつある社会であると大胆にも述べている。しかし彼の描くポスト資本主義の新しい社会は、実は資本主義社会そのものである。

ドラッカーの言う「新しい社会」とは、資本主義の世界的な発展の推進力となってきた多国籍企業の国際的展開のなかで、帝国主義本国において現実につくりだされている社会にほかなら

ず、それをイメージアップしたものにすぎない。

生産部門の国外移転を大規模に進めるが、同時にその本国では、もはや高い利潤を生みだすとのなくなった産業諸部門（主に労働集約型産業）を解体して知識集約型産業を育成し、また研究・開発部門や国際的生産・販売の統括部門の強化をはかるとする。世界的規模での激しい競争を強いられる個別多国籍企業にとって、その本国においてこうした活動をたえまなく推進していくことがどれほど重要であるかは言うまでもない。技術革新に次ぐ技術革新、新しい製品の開発と生産、国際的経営戦略の不斷の更新…。こうした努力を怠るならば、昨日の勝者も一夜にして敗者となる。そこで本国ではこれまで以上に、多国籍企業の利益に奉仕する「知識労働」＝精神労働が重視されるところとなる。ドラッカーの言う「主たる資源が知識」となるポスト資本主義の新しい「知識社会」とは、こうして帝国主義本国につくりだされる社会のことである。

そしてこの社会は次の事態を必然化させる。

すなわち国内では、「知識労働」の担い手を中心

心にしてブルジョア化した一部プロレタリアードを含む社会の上層が形成されるとともに、「知識労働」から排除された膨大な人々には不安定な生活や貧困が恒常的に強要される。ドラッカーもまたこのような新しい矛盾の発生を認めざるをえず、この二つの階層を「知識労働者」とと「サービス労働者」と呼び、両者のあいだに階級闘争が生まれることを危惧している。また一方、この「知識社会」は国外に「非知識社会」が広範に存在することを求め強制する。ドラッカーは先進諸国では、「資本主義固有の『矛盾』プロレタリアの『疎外』や『窮乏化』」そして「プロレタリアそのもの」が「生産性革命」によってすでに消滅してしまったと主張している。しかし「資本主義固有の矛盾」「疎外」「窮乏化」は消滅したのではなく、それは国内下層人民に集中させられるとともに、また広大な第三世界諸国の人民に転嫁されているのである。それらは帝国主義本国の小ブルジョアジーや上層プロレタリアートにとっては、あたかも消滅してしまったかの外観を時として示しているにすぎない。

主義の発展によってその矛盾を克服する新しい社会が生まれるとの甘言で、人民を資本主義美もとにしばり続けようと/or>る新手の資本主義美化論である。またそれは「先進国＝知識、後進国＝労働」という図式のもとで第三世界人民への困苦と貧困の強制を合理化しようとする新しい装いをまとった反動的國際分業論である。

スウェーデン共产党（KPML） からの新年のメッセージ

(小見出しほり
編集局責任)

スウェーデン共产党（KPML）中央委員会を代表し、新年の
革命的な挨拶を送ります。

吹き荒れる反動政治

代修正主義の腐敗した制度が、ついにそして完全に崩壊したとき、資本家たちは有頂天になつて、平和と自由と繁栄をもたらす新世界秩序なるものを口にし始めました。しかし、新自由主義的通貨思想や市場原理などが世界で広められるにともなつて、労働者階級には大量失業と経済的・社会的な困難が襲いかかり始めました。今日の世界には、資本主義国の労働者へのより過酷な搾取、またいわゆる第三世界の人民に対するより激しい攻撃、そして帝国主義間の矛盾の激化といった現象があちこちでみられます。資本主義は大衆のもつとも基本的な必要すら満たすことのできないということが日々明らかになります。

スウェーデンにおいては失業率はこの三年間に二・五%から一二%にまでじょじょに増加してきました。二〇%以上の失業によって青年層はよりひどく痛めつけられています。またスウェーデンの右翼的な政府は、この数一〇年間にわたって勤労人民が獲得してきた改革の成果に攻撃をかけてきていました。それに代わる何の手立てもなく、賃下げが行われ、労働者の権利に関する法規が改悪され、年金制度や失業補償制度や保険制度が大幅に変更されています。

このような反動政治は、現在の保守的な政府にのみ責任があるわけではありません。反労働者のな法律の多くは、前の社会民主主義

な政策は両者ともヨーロッパ同様のことをイデオロギーとしているもので、彼らはスウェーデンわれたものの全体を西欧世界に順次輸出しています。ますます多く反対するようになり、ヨーロッパ同盟している人々は明確な問題をめぐら

、スウェーデンは組み込んでいた部であり、またの参加が正しい目的に説明しよ。スウェーデンは、させるために、ン・モデルとい破壊しようとしたときには、これまでの反対しに多数派です。

私たちにはマリ
義のイデオロギ
と同時に、自ら
あることをめざし
ら私たちは強固
スウェーデンの根柢
りと根を張ろう
任務は巨大で大
デンの勤労大衆
い共感を集め
とをめざします
プロレタリアテ
K P M L r 中
（K P M
テディ・ジ

クス・レーニンは常に立脚する性を重視する党としています。だつて團結して進み、階級闘争にしつつしておられるのです。私たちはスウェーデンから尊敬され、のような党になる。

主であるか、かでる強さ！

アジア共同行動

日本報告

てきているのだ。

フィリピン、インドネシア
ネパール、日本で抗議行動

議にもとづいて、日米軍事同盟と自衛隊の海外派兵に反対する三度目のアジア共同行動が、一二月の前半にフィリピン、インドネシア、ネパール、日本においておこなわれた。フィリピンでは一二月一五日、マニラの日本総領事館への抗議闘争が組織された。この闘争には、バヤン、K.M.U、ガブリエラ、フィリピン学生同盟、カデナなどの諸団体が参加した。インドネシアでは、一二月八日にジャカルタで自衛隊派兵等に反対する取り組みがおこなわれ、また在日本本ソドネシア大使に抗議文が発送された。この抗議文は、第二次大戦にお

効し、進行する日本の経済・政治・軍事大国化を批判し、インドネシア政府がカンボジアPKOに自國軍隊を派遣したことに対するものであつた。またネパールでも、一二月八日にして、カトマンズの日本大使館への抗議行動が組織された。

アジア・キャンペーントリニティに参加するアジア各国での闘争と連携し、日本領事館への抗議闘争、一二月三日に愛知における集会、一二月四日に京都北部におけるシンポジウム、二月五日に福岡における集会、二月一日

保基地抗議行動、一二月八日に東京で外務省への抗議闘争とアジア人連帶集会が相次いで組織された。この三度目のアジア共同行動を通してアジア・キャンペーンはアジア各国と日本においてしっかりと根づいてきたと言うことができる。共通の政治要求を掲げ、アジア各国の人民が国際的な同時行動に立ちあがっていくという数年前までは想像もしえなかつた新しいたたかいが大きく広がつ

連総会に對して、アジア規模での抗議行動が組織される予定になつてゐる。この全過程を通して、アジア・キャンペーンはアジアにおける国際反帝統一戦線へと大きく前進し、アジア人民の連帯と未来への希望を切りひらいていくであらう。以下に報告する日本各地でのアジア共同行動の成果に立脚し、アジア各国の人民とともににこのたたかいに総結集されんことを呼びかける。

五年前の一二月八日、日本は開戦した。それは同時に日帝が侵略反革命戦争をアジア太平洋全域へと拡大する転換点となつた。そして日本軍の蹂りんと支配のもとでアジア太平洋諸国の一〇〇〇万人以上の人民が虐殺され、また多くの人々が軍隊慰安婦や軍人・軍属などに狩り出された。今日、この憎むべき犯罪が、日帝のアジア太平洋地域への経済支配、カンボジアなどへの自衛隊派兵

日本帝国主義がアジアの盟主として本格的に登場しようとする時代が始まり、これをより強化・拡大しようとする策動が日帝ブルジョアジアによって次々とうちおろされてきている。小選挙区比例代表並立制の導入、自衛隊法改悪策動、日本の国連安保理常任理事国入り策動…。そして憲法改悪と保守二大政党体制によつて、再びぐり返されようとしている。

る翼賛体制の構築。これらの日帝ブルジョアジーの攻撃を打ち碎くたな
かいは日本人民の重大な任務であり、
日系多国籍資本がすみずみまで侵出
したアジア諸国人民にとつても大き

雨と風をついて
な閑心事となつてゐる。



抗議行動の前段集会(檜町公園)



諸団体を広範に結集してかちとられた東京のアジア人民連帯集会

隊海外派兵反対、憲法改悪反対、日本の国連安保理常任理事国入り反対をかげてアジア共同行動が東京でたかわれた。アジア共同行動は、日本、フィリピン、台湾、ネパール、インドネシア、マレーシア、韓国、香港、インド、東チモール、バングラデシュ、オーストラリアの労働運動や人民組織の代表が参加した昨年の「日米軍事同盟と日本軍の海外派兵に反対する一〇月国際会議」によって決定された行動である。この日の取り組みは、本年の六月一五日のアジア共同行動を受けつぐものであり、また一月に開催された国際シンポジウムの成功を踏まえてたかわれたものであった。

当日は、昼に防衛庁・外務省への抗議行動と街頭デモが行われ、夜にはアジア人民連帯集会が開催された。防衛庁・外務省への抗議行動を前にして、雨と風がたまきつける檜町公園に約七〇人の労働者・学生・市民が集まつた。学生の前段集会が首都圏・関西から参加した仲間によてかちとられた後、「許すな、派兵・憲法改悪！日本の国連常任理事国入りに反対する国際シンポジウムと一二・八アジア共同行動実行委員会」の主催によって、抗議行動の前段集会が始まった。

日本フィリピン連帯運動・東京の司会を受け、実行委あいさつが自立してから、仲間によてかちとられた後、「許すな、派兵・憲法改悪！日本の国連常任理事国入りに反対する国際シンポジウムと一二・八アジア共同行動実行委員会」の主催によって、抗議行動の前段集会が始まった。

ひきつづく夜のアジア人民連帯集会は約一五〇人の結集によって開催された。南部政会館の集会室は立ち見も出るほどにぎっしりと埋まり、そのなかを国際シンポジウムとアジア共同行動の呼びかけ人の一人である全国一

一五〇人が参加

バヤンとガブリエラの代表、そしてインドネシアの代表が拍手によって迎えられた。冒頭、司会から開会の挨拶が行われ、一月に開かれたアジア・キャンペーン国際幹事会と国際シンポジウムによって、アジア人民の国際共同行動が日本の国連常任理事国入りを阻止するたかいいとして新しく踏み出されたこと、そのたかいいの最初の決起集会をここに開始するとの趣旨が表明された。最初に「日米軍事同盟と自衛隊の海外派兵に反対するアジア・キャンペーン」国際事務局から発言を受けた。彼はまず、今回のアジア共同行動にフィリピンの諸団体、インドネシア、マレーシア、オーストラリアから連帯メッセージが届いていること、また電話で東チモール、台湾、韓国からメッセージが寄せられたこと、そしてネパールの労働組合総合を通じてインドネシア・バングラデシュなど南アジア地域の諸団体からもメッセージが送られてきたことを紹介した。そしてアジア共同行動として、インドネシア、フィリピン、ネパール、日本で取り組みが行われていることを明らかにした。さらに、二月に開かれたアジア・キャンペーン

労連によって行われた。諸団体からの発言が行われる。全国一般労働組合全国協の労働者は「たかわないとたかわれた。アジア共同行動は、ひとりの労働者ががんばって、戦争への突入を阻止していかねばならない」と訴えた。自立労連の代表は、国連常任理事国入りを策動する外務省の動向を報告し、また連合が小選挙区制導入のために社会党護憲派を引き崩す動きを強めていることを弾劾した。全国労働者政治委員会は、国連常任理事国入りをもつてする日帝の新たな派兵攻撃に対し、アジア第三世界の反帝民族解放・社会主義革命との国際主義的連帯によってたかおうと呼びかけた。海外派兵とたかの首都園生の会からは、フィリピン学生同盟との反帝共同闘争をたかいたことが報告され、國際主義に貫かれた学生運動を今後つくりだしていくとの決意が明らかにされた。発言の最後に、この日の行動の呼びかけ人の一人である全国一

般全国協委員長の中岡氏のアピールを受けた。中岡氏はとくに小選挙区制反対闘争についてふれ、九・一〇日の議面集会、一四日の全国集会へ出発した。日米軍事同盟を解体しよ断固阻止しようと訴えた。

冷たい雨を吹き飛ばすような熱気あふれるデモ隊が、防衛庁にむけて出発した。日米軍事同盟を粉碎しよう！自衛隊海外派兵反対！国連の軍事介入反対！などのシュプレヒコールをまず防衛庁にたたきつけ、つづいてアメリカ大使館横を通りながら米帝への弾劾行動をたかいい、そしていよいよ外務省への抗議行動が始まった。抗議行動の参加者が外務省正門前に結集し、代表の二人が抗議文をもって外務省国連政策課に入ろうとした。国家権力がこれを妨害し、また天皇主義右翼が宣伝カーを使って襲撃を試みようとするなか、デモ隊はこれをはねのけ、「日本の国連常任理事国入りを断念すること」「アジア人民の戦後補償を求める声に真しに耳を傾け、侵略の事実究明、心からの謝罪と補償、責任者の処罰、歴史書への事実の記述をはじめこのような事態をふたたびくり返さないためにあらゆる努力を払うこと」「国連事務総長ガリの来日を中止させること」を要求していくのである。

行動のために来日したフィリピンのキャンペーンの方向性として、日本軍事同盟との闘争に加えて日米の経済支配との闘争を強化していくこと、日帝のアジア侵略を暴露・宣伝するビデオやコミックを作成し大衆的教育を強化していくこと、人民の間の交流を発展させるために九四年にはフィリピンだけでなくインドネシアやネパールへの訪問を計画していること、ネパールでは人民の闘争がきわめて重要な局面にさしかかっており、九四年には当地で国際シンポジウムを開催する予定であること、そして第二回の国際会議を日本で開催することなどが報道され、さらに、このキャンペーンを通じてアジア人民のかいと团结をいつそう強化するとの力強い決意が述べられた。

続いて海外代表の発言が行われた。まずフィリピンのガブリエラの女性は次のように発言した。「本日は第二次大戦で三〇〇〇万以上のアジア人民が虐殺された五二回目の記念日だ。これに先立つて一八九五年には台湾の、一九一〇年には朝鮮の植民地支配が開始された。そして多くのアジア人民が虐殺され、強制連行され、二〇万人以上の女性が慰安婦になることを強要された」「フィリピン人民は再びアジア人民を脅かし始めている日帝を一掃するためにたたかわれた。諸団体から



帝とのたたかいの勝利は日本人民の肩にかかっている。アジア人民は連帯しあい、共通の政治課題のもとで団結してたたかおう」。

るものであつた。一九二〇年代から鉄道労働者や教育労働者を中心とした労働運動が開始された。そのころ共産黨の指導のもとで帝国主義とたかう労働者のための新聞・雑誌が数多く発行されていた。二六年には、反帝闘争にたちあがつた労働者たちが弾圧され一万人以上が亡命した。四二年に日本軍の軍事支配が始まり、大衆運動はすべて非合法化され、左翼は虐殺され多くの女性が強姦され

一 匹 寸 体 が 発 言

（）した海外代表の発言は、参加者は深く感動し大いに鼓舞された。つづいて大阪経済法科大学の吉川暁夫氏から「日本の国連安保理の任理事国入り批判」の講演に移った。世界同時不況が進むなかで、イタリアの最新の情勢のみられるよう世界の労働者の闘争が前進しはじめたことにふれながら、山川氏はわりやすく豊富なデータにもとづく勢分析を展開し、日本の戦後における国連政策の問題点を解析し、また細川政権の大政翼賛会的状況を暴露した。そして第二次大戦において日本が破れたのは米国ではなく、ア

点を強調したうえで、「五五年体制が歴史的に崩れる時に日本は国連常任理事国入りする。戦後が終わり世界は新しい時代に入ろうとしている。九五年をめざしたアジア民衆の交流をこのような歴史の中に位置づけ、今の動きに取り込まれずに、派兵国家への道を許さずたたかっていこう」と呼びかけた。

集会は後半に入り、一四団体のリレー・アピールが行われ、それぞれの団体から決意表明や今後のたたかいの方向などが述べられていった。沖縄一坪反戦地主会関東ブロックからは、沖縄におけるP3C基地建設の阻止闘争の報告と呼びかけが行われた。新学習指導要領を白紙撤回させる三・多・摩ネットワークからは、

愛知におけるアジア共同行動として、二月三日、名古屋の愛知県中小企業センターで「アジア人民連帯」問う、自衛隊派兵・憲法改悪・国連常任理事国入り・愛知集会」が、約五〇人の結集で開催された。集会では冒頭の、日米軍事同盟と自衛隊の海外派兵に反対するアジアキャンペーン国際幹事会（CCB）からの報告

に続いて、インドネシアとフィリピンの代表からの発言が行われ、これを持めぐって質疑応答が活発にかわされた。フィリピンのガブリエラの代表は、元「従軍慰安婦」を始めとするアジア人民の戦後補償要求に対する日本政府の欺まん的決着の策動を弾劾し、日本の国連常任理事国入り策動に対してたたかうことを訴えた。

闘う労働運動の 共闘で集会開く

愛知
12・3

外派兵とたたかう首都留学生の会は
六・一五アシア共同行動において全
国学生集会を前段に取り組んだこと、
この秋にはフィリピン学生同盟と交
流し反帝共同闘争を確認しあう一一
・一三全国学生集会を一二大学約一
〇〇人の学友と開催したことを報告す
る、アジア人民と連帯する学生運動

島を先頭とした反派兵闘争や反天皇闘争の報告が行われ、不況合理化攻撃に屈伏する連合・翼賛勢力とたたかい、労組の政治闘争によってアジアの仲間と手を結ぶ質との発言が行われた。自立労連タカラブネ労働者からでは、笛島を軍隊へ絶対やらないためにもたたかうと発言。山谷労働者からは、笛島を先頭とした反派兵闘争や反天皇闘争の報告が行われ、不況合理化攻撃に屈伏する連合・翼賛勢力とたたかい、労組の政治闘争によってアジアの仲間と手を結ぶ質との発言が行われた。自立労連タカラブネ労

「日の丸・君が代」攻撃に対する地
域での反対闘争が報告され、「日の
丸・君が代」や天皇制を許してきた
意味をとらえてアジア人民と連帯し
てたたかうとの発言が行われた。ス
トップ海外派兵！大田共同行動は、
自衛隊法改悪の最新の動きを暴露し
これに反対する東京南部での地域集
会とデモへの参加を呼びかけた。海

にこだわっていきたいと発言。ワーカーズは、イタリアでのファシズム勢力の台頭の脅威、アジアにおける武器市場・軍拠競争の激化などによつて、軍国主義の基礎にある資本主義の支配を見ぬき、労働者階級の党をつくり、共同のたたかいをと呼びかけた。海外技術研修団^{労組}は、徴兵制が近い気がするし、自分の子

のなかで IMF・世銀の投資や日本企業の経済侵略が加速している。

そしてインドネシアの代表は発言を次のようにことばでしめくった。

「ともに支援しあい、共同のたたかいをつくろう。」

の運動を担うとともに、国連PJKOのそのものや日本の国連政策を批判したたかうと主張した。東水労青年女性部は、政治闘争をしない企業内主義が広がっているなか、アジアに侵出した企業のアジア製品があふれる

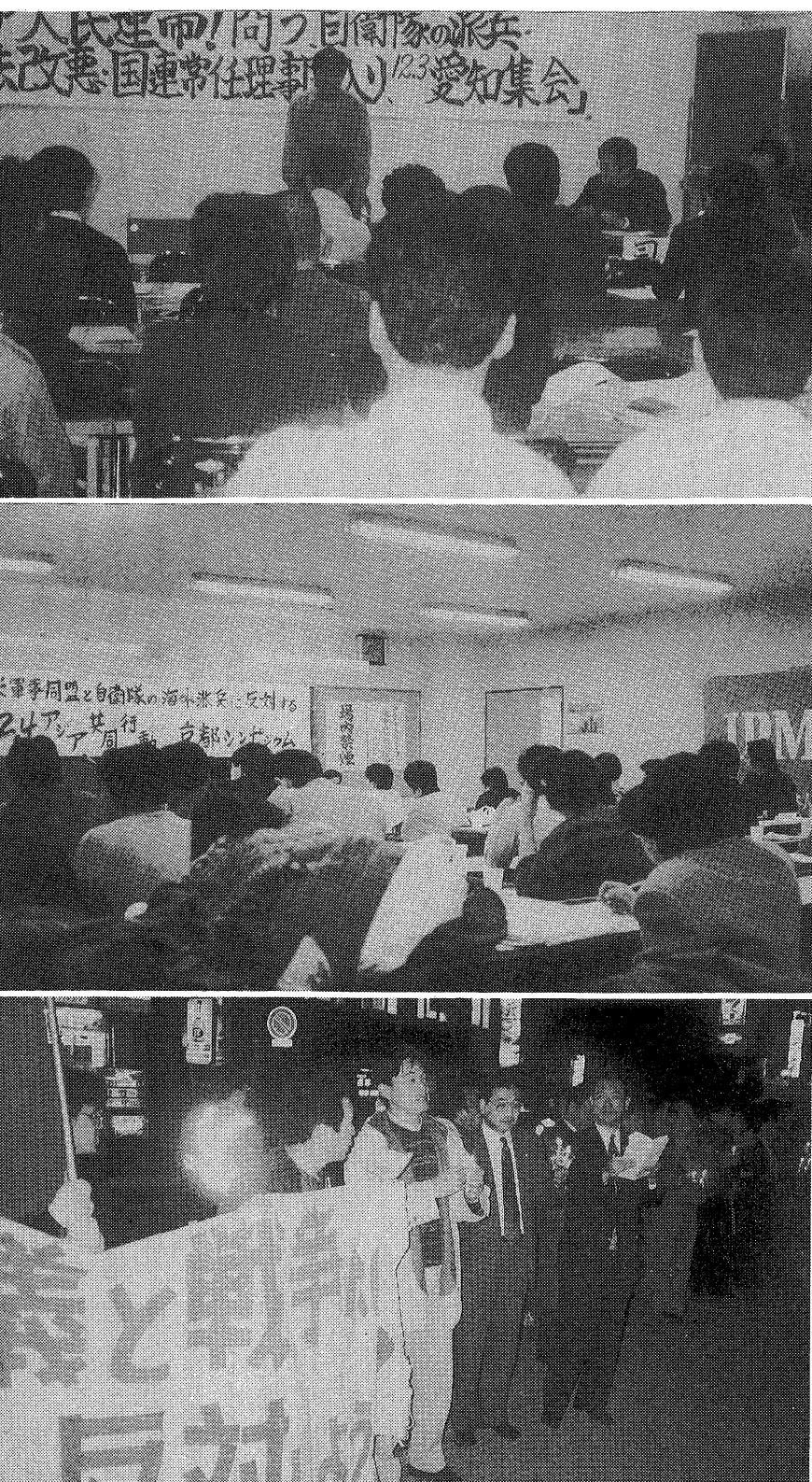
た。その後、四五年の占領終了とともに労働運動が鉄道やプランテーションの労働者によって発展していくが、六五年に軍と資本家によりインドネシア共産党・左翼勢力と労働運動はたたきつぶされた。スハルトは「新秩序体制」を敷き、労働運動は全インドネシア労組という御用労組に支配された。九〇年代に入って、軍部以上に弾圧に積極的な警察を使つて、外国企業誘致のための国内安定化政策がとられるようになった。そ

意表明した。全国一般労働組合全国協は、労組が政治闘争をやることがでしんどくなっている状況のなかで、反戦平和闘争にこだわりたたかい続けると発言。部落解放同盟墨田支部青年部は、部落解放運動の翼賛化政撃と差別の強化のなかで、戦争を許さないために小選挙区制反対、反天皇闘争をアジアの仲間に応えたかうと発言。派兵チエック編集委は、常任理事国入り反対、憲法改悪反対

大いに運動を

アジア・キャンペーンとアジア共同行動は、この秋、首都圏でも大きな前進と発展をかちとった。大失業時代の到来と自衛隊海外派兵が拡大される情勢のなかで、首都圏におけるたたかいは労働者人民の憤激を糾合し政治決起の重要な戦線へと発展していく。九四年、このたたかいをさらに大胆におし進め、日帝の派兵・改憲・保守二大政党制攻撃に立ち向かう、プロレタリア国際主義で武装された力強い運動へと前进させよう。

インドネシアの代表は、インドネシア政府への最大の援助国が日本であることを告発し、インドネシア人民と日本人民の共同闘争の必要を訴えた。質疑の中では、東チモールの独立闘争について討議され、圧政下のインドネシア人民が東チモールの独立闘争に連帯するたたかいを作り上げることの困難性を踏まえた上で、インドネシア人民と日本人民の共同の支援・連帯闘争を強めることができ認められた。また、日本の文化侵略がフィリピンやインドネシアにおいてどのように進んでいるのかなどが討議された。



海外の代表を迎えて シンポジウム開催

の会、自立労連タカラブネ労組中部支部、名古屋労組連などから発言が行われた。笹日労とあるすの会の代表からは、現在の不況下で景気の調整弁として日雇い労働者がまつに職を失い街頭に放り出されている中で、日雇い労働者の仕事と生活を守る闘争と滯日外国人労働者の組織化を一つのものとしてたたかっていること、こうした実践の中からアジア人民連帯、天皇制打倒、差別排除主義との闘争をおしし進めるという決意

が表明された。また名古屋労組連や
タカラブネ労組などからは、二大保
守政党制攻撃と社会党の保守化のも
とで、たたかう労働者・労働運動が
アジア人民と結合した独自の全国的
闘争を追求すべきだという問題提起
も行われた。

この日の集会では他に集会宣言の
採択と、また国軍に事務所を襲撃さ
れたインドネシアの組織への支援カ
ンペの呼びかけが行われた。

この日の愛知におけるアジア共同

行動は、アジア人民との結合をめざすたたかう労働運動の政治的共同闘争を新たに発展させるものであった。細川政権のもとで、二大保守政党官僚の再編成の策動と社会党の保守党としての純化が進んでいる。こうした中で今後、階級的労働運動と国際主義政治闘争の共同の陣形を愛知においていかにたたかいとつていくのか、このことがより一層具体的に問われる段階に入っていると言えよう。

としており、現大統領ラモスは、フィリピン人民のたたかいによって撤去された米軍基地跡に新たな輸出加工区を作ろうとしていることが暴露された。そして輸出加工区で労働運動を組織しようとすると侵權がなされ、非常に多くの人権侵害がなされていることが報告された。

またインドネシアでは、債務の返済のために労働者から給料の五%を強制的に徴収する制度が設けられており、また最低賃金も一週間で約一〇〇〇円と、アジアでも最低ライン

二月四日 京都部屋解放センターにおいて、約五〇人の結集で「日米軍事同盟」と自衛隊の海外派兵に反対するアジア共同行動－京都市内シンポジウム」が行われた。まず最初に一月二一、二二日の両日にわたって開催されたアジア・キャンペーン幹事会（C.C.B.）会議の報告がなされた。報告の中では、「アジア太平洋地域において日本の軍事支配が急

速に強まりつつある現在、アジア人
民の共同闘争の力で日本の軍事支配
を打ち破っていくとともに、来年日
本で開催することが決定された第二
回国際会議を成功させていこう」と
いうことが参加者に訴えられた。

大な対外債務を抱えており、フィリピンでは国家予算の四〇%が借金返済にあてられ、社会保障費を始めとする人民の生活に必要な予算が削減されるという現状があり、さらに最低賃金が約一〇〇ペソ（四〇〇円）に抑えられていることが暴露された。加えて、フィリピン政府はカラバルソン計画など、輸出加工区を設けることでますます海外投資を増やそう

に転嫁されること、IMF・世界銀行の「援助」は現地政府を喜ばせ、労働者からの搾取を強めるだけであるということが明らかにされた。もう一つは、運動への女性の組織化がどのように進められているのかという問題についてであった。ガブリエラの代表からは次のようないい発言が行われた。「七〇年代の反マルコス独裁運動には女性が多く参

インドネシアの代表が発言に立ち、その発言を受ける形で参加者から質問や意見が多数提出された。質問とそれに対する発言の内容は大きく分けて、次の二つであった。

一つは IMF・世界銀行体制による構造調整プログラムを通した帝国主義による支配の状況という問題についてであった。

さらに現在インドネシアで激化している「反宝くじ」運動は、この宝くじ制度が債務返済のために導入されたもので、下層労働者からの搾取を目的としたものであることから、これに反対する運動として組織されたものであるとの説明がなされた。そしてこうした事実から、結局、借款返済のしわ寄せはすべて労働者

愛知集会(12月3日)▶

京都シンポジウム(12月4日)▶

大久保基地包囲デモ(12月7日)▶

加した。なぜなら地方における軍の
人権侵害に対するたたかいに多くの
女性が立ち上がったからである。運
動組織の教育コースの中では、女性
の敵は男性ではなく、半植民地・半
封建主義社会であり、帝国主義であ
ることが教育されていった。そして
きわめて戦闘的な女性運動が組織さ
れたが、逆にそのためにマルコス時
代に女性運動が非合法化されてしまっ
た。その非法女性運動組織として
マキバカが結成された。これ以降、
女性の組織化はかなり困難になった
が、アキノ政権の発足という新たな
条件の中でガブリエラが発足し、そ
の後女性運動は再び活性化した」
「現在では教育活動を積極的にを行い、
政治的経済的な問題をていねいに扱っ
ている。そうしないと女性労働者を
集会やデモに組織することはむずか
しいからである。この教育活動の中
で最も重要なのは、経済的政治的な
社会条件の中で女性の位置とは何か、
そして女性だけではなく男性や子ども
もとともにどのような運動をつくっ
てていくのかを、女性労働者といっ
しょに考えていくことである」「一
方、同じ組織の男性に、あるいは社
会の男性に向かって女性の組織化の
重要性を訴えることがきわめて重要

とはできないからである。インドネシアの代表は次のように発言した。「私たちは労働運動の組織化にたずさわっている。女性労働者の組織化という問題では、現在是非常に困難な状況にある。なぜなら女性のオルガナイザーがないからだ。そのような状況のなかで、まずは女性労働者の置かれている条件を調べている」「また教育活動の中で、資本主義や帝国主義のしくみ、あるいは私たちの社会の未来像―社会主義の問題についても話し合っている。インドネシアもフィリピンと同様、半封建的・半植民地的な社会であり、この社会構造が労働者の敵であると考えている。また、今日のインドネシアの政治状況や選挙の問題についても、教育活動の中で基本的な知識

京都南部

12
7

キヤンンドルデモで 大久保基地を包囲

方 同じ組織の男性は、あるいは社会の男性に向かつて女性の組織化の重要性を訴えることがきわめて重要である。なぜなら、それが理解されないと共通の敵である帝国主義を男性と女性がともに打ち破っていくこと

「日米軍事同盟と自衛隊の海外派兵に反対する」アジア共同行動の二環として、許すな海外派兵！憲法改正！アシア連帯京都南部集会が、京都南部の労働組合を中心に一二月七日

日、宇治市でおこなわれた。集会ではまず、小城修一アジア・キャンペーン共同代表から二日間にわたって論議された国際幹事会の報告がなされた。続いて発言に立ったフィリピンとインドネシアの代表から、彼らは「現在のアジア人々の苦しみは日本と米国の支配が原因である。日本と米国の支配が強化は労働者のたたかいをつぶすためのものである」

アシアの仲間の発言に續いて集会に参加した日本側の発言として、昨年、宇治の大久保自衛隊基地からの第一次派兵に反対して全国闘争を組織した自衛隊の海外派兵に反対する平和行動実行委員会や、洛南労働組合連絡会議、宇治の市會議員がそれぞれ現在、細川政権のもとですすめられている自衛隊法の改悪や憲法改悪の動きに反対し、政府の考えてい「新しい秩序」を打ち破っていく

米大統領への要望書

「先の帝国主義戦争でアジア諸国は筆舌に尽くしがたい苦しみと犠牲を強制された。現在、日本は経済力を利用してアジアに対する強い影響力

うと決意表明した。その後、集会に参加した労働者たちは大久保自衛隊基地を包囲するデモでアジア共同行動闘争を貫徹した。

私たちには抗議の意志をこめて、以下の点についてアメリカ合衆国大統領であるあなたに強く要望します。

(2) アメリカ合衆国政府は、ハイチに対するいかなる干渉政策・戦争挑発もとらないこと。ただちに、ハイチに対する経済封鎖を解除するための行動を起こすこと。
以上の二点を要望します。

一九九三年一月二十五日
ふたたびアジア人民をじゅうりんし、侵略し、支配しない

岡山・山口国際 音楽集会成功す

補償の欺瞞的決着を許すな！国連の軍事介入に反対しよう！九州・山口国際連帯集会」が、一二月五日午後一時から福岡市民会館において開催された。この集会には、アジア・キャンペーン国際事務局およびインドネシアの代表が参加し、国際幹事会（CCB）会議の決定を報告すると

賀

世話人代表 小城修二

福岡 12・5

九州・山口国際 連帶集会成功す

アジア共同行動の一環として「日
本の国連常任理事国入り反対！ 戦後

アジア・キャンペーンが着実に前進していることを示した。

とはできないからである」。
　　インドネシアの代表は次のように
　　発言した。「私たちは労働運動の組
　　織化にたずさわっている。女性労働
　　者の組織化という問題では、現在は
　　非常に困難な状況にある。なぜなら
　　女性のオルガナイザーがないから
　　だ。そのような状況のなかで、まず
　　は女性労働者の置かれている条件を
　　調べておる」「また教育活動の中で、
　　資本主義や帝国主義のしくみ、ある
　　いは私たちの社会の未来像―社会主
　　義の問題についても話し合っておる。
　　インドネシアもフィリピンと同様、
　　半封建的・半植民地的な社会であり、
　　この社会構造が労働者の敵であると
　　考へておる。また、今日のインドネ
　　シアの政治状況や選挙の問題につい
　　ても、教育活動の中で基本的な知識

集会後に交流会

を共有するという作業を行っている。というのも、女性労働者たちが政府の政策に賛成し、賛成票を投じてしまうという現状があるからだ。しかしながら私たちの団体が女性労働者の組織化を始めたのは今年からで、今後も今回のガブリエラの代表との交流を始め、多くの機会をとらえて学んでいきたいと考えている。」

世界支配に反対する闘争を今後強めていくこと、そして女性プロレタリアートが固く団結して、ともに共通の敵である帝国主義に対するたたかいを強めていくこと」というまとめが提起された。そして集会決議文が採択され、長時間にわたるシンポジウムは終了した。

また、教育活動に必要な資料や機材が三ヶ月前に国軍の襲撃を受けてすべて持ち去られたという状況を受けて、インドネシアの代表から支援要請が行われ、一万元を越すカンパニーがシンボジウム参加者から寄せられた。その後、場所を別に移して交流会が行われたが、そこにも三〇人近い参加者が引き続き参加し、最後まで充実した交流と議論が行われた。

世界支配に反対する闘争を今後強めていくこと、そして女性プロレタリアートが団結して、ともに共通の敵である帝国主義に対するたたかいを強めていくこと」というまとめが提起された。そして集会決議文が採択され、長時間にわたるシンポジウムは終了した。

また、教育活動に必要な資料や機材が三ヵ月前に国軍の襲撃を受けてすべて持ち去られたという状況を受けて、インドネシアの代表から支援要請が行われ、一萬円を越すカンパがシンポジウム参加者から寄せられた。その後、場所を別に移して交流会が行われたが、そこにも三〇人近い参加者が引き続き参加し、最後まで充実した交流と議論が行われた。

をもつており、アジア諸国は日本の一再侵略に直面している。次の世代に二度と同じ苦しみを味あわせてはない。日本とフィリピンの共通の敵・日本帝国主義に対するたたかいと共に前進させていこうとの力強いアピールがなされた。

●新年号第一論文

インター！再建揚げ 国際共産 党的團結組織する党建設を

共産主義はその本性からしてあらゆる被抑圧人民の解放の希望であり、人間による他の人間への搾取、人間による他の人間への支配に抗する闘争の希望であり、理想の社会の展望である。マルクス・レーニン主義は、この希望と展望に科学的武装を与え、そうすることによって、あらゆる空想的社会主义の誤り、経済主義・日和見主義の泥沼からプロレタリアート人民の進路を峻別し、共産主義をプロレタリアート人民の社会主义世界実現の実践原則、実践的指針へと確立した。プロレタリアートの国际主義はまた、共産主義の重要な一部である。プロレタリアートの国际主義と区別された共産主義はありえない。主体的には過去数年にわたり、実践的国际主義、国际主義プロレタリアートの建設を掲げ、人民の前衛に立ちつづけてきたわが党にとって、客観的にはソ連邦・ソ連共产党の崩壊、帝国主義の世界支配と抗争の現代世界にあって、プロレタリアートの国际主義をさらに鮮明にし、共産主義運動としっかりと結合せしめることはきわめて重要な任務である。二十一世紀を世界党の再建をもって開始される国际主義プロレタリアートの総反抗へと準備する活動をわが党は担わねばならない。

国際主義はわれわれの経験からしても、また歴史的にも、そのもとも大衆的な基盤において、二つの非共産主義見地と同行し、かつ闘争してきた。帝国主義本国、あるいは発展した資本主義国にあっては、普遍主義や世界主義（コスマポリタニズム）、第三世界にあっては民族主義である。

神聖ローマ帝国の漠然たる構造のうちに、ヨーロッパに形成されたキリスト教國際社会への願望は、中世的諸帝国の崩壊につれ、資本主義の勃興に支えられたブルジョアジーの民族国家形成の運動へと転化した。近代におけるヨーロッパの主権国家形成の過程は、まずもって民族国家独立過程におけるナショナリズムと結合した新支配階級たるブルジョアジーの「国際主義」発生の過程でもあった。のちに各民族資本の強大化とともに、市場拡大を不可避とするブルジョアジーのナショナリズムと結合した「国際主義」は、その発生の初期に含有した理想主義をかな

かにそのブルジョア国際主義の階級性を具現している。

しかしこのブルジョア国際主義形成の前半史は、中世的諸帝国と支配民族への弱小周辺民族の隸属状態に対する人民の反抗と結合して成長したことでもまた事実である。一九世紀中期に高揚する自由主義的国際主義は、いわば最後の国際主義に関するブルジョアジーとプロレタリアートとの同行であり、また民族主義に関する最後の共闘であったといえる。

国際主義における階級対立は、一九世紀中頃より急速に形成された。ブルジョアジーの国際主義は初期にあってはイギリス、後期にあってはアメリカの帝国主義、わが国にあっては「大東亜共栄圏」にみられるごとく、資本の世界的支配という欲求のイデオロギー的表現である世界主義（コスマポリタニズム）に転化した。コスマポリタニズムはその内実にあって、もっとも根深い支配民族—帝国主義本国民族の民族主義であり、国家主義である。

今日、帝国主義本国のプチブル層を中心として発展している国際援助運動、あるいは国際環境保護運動さえも、それ自身コスマポリタニズムへの批判視点から洗われ、プロレタリア国際主義をこれらから分岐する必要がある。

ア解放闘争の基本的条件として理論づけられ、「万国の労働者、団結せよ！」と結論づけられた。何ゆえプロレタリアートのみが国境を越えて団結できるのか。資本とブルジョアジーによる支配と搾取は国境の壁を越え、全世界の人民に及ぶこと。その支配は全世界の人民を分裂させ、対立させ、そうすることによってますます人民の奴隸状態を強化すること。プロレタリアートは日々の生産労働を通じて一切の生産物と生産手段の私有から自由な唯一の階級であり、日々の協業を通じ、他の労働者との不可分離な結合を体得する階級であること。プロレタリアートは自らが搾取されることに抗するのみではなく、

プロレタリア 国際主義の原理

国境こえ団結する プロレタリアート

プロレタリア国際主義は、一九世紀ヨーロッパ資本主義下の資金奴隸の反抗と団結の闘争のなかから生み出されてきた。また同時に、非ヨーロッパ世界の民族独立・反植民地闘争への連帯のなかから生み出されてきた。一八四〇年代、イギリスのチャーチスト運動によってはっきりと具体化したこのプロレタリア国際主義は、一八四八年の『共産党宣言』によってプロレタリ

人間が他の人間を搾取し支配することのない世界を創出しようとしてたたかっているのであり、したがつてまた、一つの民族が他の民族を抑圧することの一切に反対し、そのような制度を破壊し、社会主義世界を実現しようとしてたたかっている階級であるからである。

全世界のプロレタリアートの利害は、たがいに一致し共通する。プロレタリアートは資本主義を打倒し、社会主義を建設する闘争において国際的に固く団結し、協力しなければならず、またそうしうる唯一の階級であることが『共産党宣言』において、また一八六四年の国際労働者協会（第一インターナショナル）の創立宣言において鮮明にされた。ここにプロレタリアートにおける階級であるからである。

マルクス・レーニン主義は、プロレタリア國際主義を原理づけ、原則づけるとともに、それをインターナショナルの組織化と領導という革命的実践のなかに具体化した。三つのインターナショナルを貫いて、マルクス、エンゲルス、そしてレーニンに代表されるマルクス・レーニン主義のプロレタリアートの國際主義の実践は、前記の原理と原則のうえに、まずもって現状世界人民が「民族と國家に分断されている」とい

時代は國際主義の 再建を求めている

われわれは一九九四年を、世界党再建を実現する二一世紀を直接準備する世界党会議の成功への第一歩として、それを担い切る党建設の出发点として全力を傾ける。なぜならソ連邦、ソ連共产党の破産以降、われわれの知る限りにあっても、九二年四月平壌における国际党会議、九二年七月、ドイツにおいて開かれた第三回マルクス・レーニン主義党国际会議、九三年六月、カルカッタにおけるマルクス生誕一七五周年記念共産党国际セミナー、九三年七月、ハバナにおける第四回サンパウロ・フォーラム、九三年一一月、ドイツMLPD主催による毛沢東思想セミナーなどが組織された。またわれわれ自身の手によつても、アジア、ヨーロッパのいくつかの共産党と複数回の議論と連帯が組織され、いくつかの党と長期的な党的連帶と結合がすでに組織されているからである。もちろん現在活性化し始めたこれら例示した国际会議は、それ自身から世界党が成長するものでは決してない。それらはスターリニズムの破産から敵階級によって喧伝される共産主義死滅論への反抗であり、うちつづく世界帝国主義の攻撃からの防衛という、さしあたつての集合という性格をもつている。また例示した集会が示すように平壌会議などは、たとえスターリニズムによる国际共産主義運動支配に反発するものであれ「社会主義運

時代は国際主義の
再建を求めている

マルクス・レーニン主義は、プロレタリア国際主義を原理づけ、原則づけるとともに、それをインター・ナショナルの組織化と領導という革命的実践のなかに具体化した。三つのインターナショナルを貫いて、マルクス、エンゲルス、そしてレーニンに代表されるマルクス・レーニン主義のプロレタリアートの国際主義の実践は、前記の原理と原則のうえに、まずもって現状世界人民が「民族と国家に分断されている」とい

う現状認識にしっかりと立っている。そのうえで諸民族の自己解放のための革命の実践の統合を通して、社会主義勝利の基盤である全世界プロレタリアートの单一化、全世界資本主義の打倒を当面の目標としたものと言える。したがってプロレタリアートの国際主義は「万国の労働者、団結せよ！」の重要な内実として、プロレタリアートを各地に引きずり込むとする誤りに対する党派闘争であり、小生産手段の私有たる本性から脱皮しようとする農民のプロレタリア化、すなわち労農同盟であり、反帝・反植民地・民族解放闘争を社会主義と結合せんとする民族解放・社会主義革命への連帶であり、帝国主義戦争に反対する帝国主義本国人民の反帝統一戦線でもあった。

動は自主的運動である。社会主義は国と民族国家単位で開拓され建設される。個々の国々における社会主義偉業はその国の党と人民が責任をもつて遂行しなければならない」（平壤宣言）にみられるごとく、自主性の立脚点は一国社会主義に定められるという根本的な反マルクス・レーニン主義がみられる。また一方では、毛沢東中国革命の戦略・戦術の歴史的意義と世界革命上の限界を明確にせず、スターリン主義の破産を直視せず、国際共産主義運動の前途課題を、毛沢東主義への逃げ込みにすりかえる誤った傾向もまた存在している。

しかしそれらの限界を乗り越え、はつきりしてのこと、また共産主義者としてもっとも重視しなければならないことは、スターリン主義ソ連共産党的破産後、国際共産党間の議論と連帶の必要性が多くの党によって認識され、かつ実行に移されているという事実である。この事実は、プロレタリア国際主義の再建、世界党再建のための歴史的な必要性とそれを可能にする歴史的な時代の到来を意味している。参加した、また九四年度に組織されようとする国際会議に結集する数十の国々の百数十にのぼる党派の背後には、第三世界を中心に、切実たるそれぞれの革命運動への支援と連帶、ソ連邦・ソ連共産党破産の明確な総括、自国革命と社会主義勝利結合の路線と戦略、そしてこれら国際会議の目的とすべき組織の性格と形と任務、これを要求する膨大な被抑圧プロレタリアート人民の希求があることを知らねばならない。



三つのインターの歴史と総括

プロレタリア国際主義は、万国の労働者の団結の組織化の要求にある。それは一八六四年、国際労働者協会（第一インター）の組織化に始まり、第一インターの組織化、第三インターの組織化、そして現代世界プロレタリアートの任務としての世界党建設にまで引きつがれる一連のものとしてとらえられねばならない。一八八九年、第二インター創立大会における「国際労働者協会は死んではない。各国の強大な労働運動のなかに残っており、生き続けている。さらに、われわれのなかにも生き続けているのだ。この大会は国際労働者協会がつくりあげたものなのだ」というリープクネヒトの言葉はわれわれのものもある。そしてそれは精神的なものにとどまらず、その総括を通して確固たるわれわれ現代プロレタリアートの武器となる。階級闘争の経験はまだ党によって蓄積されうるからである。われわれはしたがって、ごく簡単にでも、第一インター、第二インター、第三インターの設立の条件とその歴史的な任務、そして解体の主原因を明白にしておく必要がある。

階級間連帯を宣言した第一インター

第一インターナショナルは歴史のなかに突如として組織されたのではない。その前史には、一八三〇年代のチャーチズムによる強力な国際主義運動があり、亡命者同盟、正義者同盟、そして共産主義者同盟（一八四七～五二年）は、プロレタリアートによって構成され、はつきりと国際主義の組織であった。非マルクス主義組織のなかにあっても一八四四年にロンドンで組織された友愛民主主義者協会の宣言は、「地球とそれが生み出す自然の生産物は、すべての人間の共有財産である」と述べている。これはプロレタリアートの国際主義の基礎思想であり、プロレタリアートの最初の国際的組織の誕生とみることができる。

第一インターはその前史の運動を含め、以下のような当時の歴史的条件のもとで組織された。それはまず、一八四八年のヨーロッパ革命後の長い反動の時代のうち、西ヨーロッパにおける資本主義の急速な発展と、それに基礎づけられたブルジョアジーとプロレタリアートによるヨーロッパ諸民族の独立革命闘争の高揚であった。イギリス、ついでドイツ、アメリカでの労働組合の結成とその運動の発展、一八五七年の大恐慌とヨーロッパ、アメリカでの一八六〇～六二

年の強力なストライキ運動、またブルジョア民衆主義・民族運動の高揚によるアイルランド解放闘争、オーストリアの支配に対するイタリア民族革命戦争（一八五九年、ガリバルディによるイタリア解放と統一）、一八六三年、ボーランド蜂起、そしてアメリカ南北戦争（奴隸解放闘争）などは、当時の資本主義国プロレタリアートの国際主義高揚を生み出した。

これらを背景とし、一八六一年にはロンドンにおいて、イギリス、フランス、ドイツの労働者たちが労働者インターナショナル設立の討議を行い、六三年七月に同じくロンドンにおいて開かれたボーランド独立要求の大衆集会時にさらにこの討議は進み、一八六四年九月一八日のロンドン、セント・マーティンズ・ホールの集会へと結実した。

嘗々たる前史の積み上げのうえに結実したセント・マーティンズ・ホールの国際集会は、「フランス、イタリア、ドイツ、ボーランド、イギリス、その他およそ人類の幸福のために力を合わせよとの意志のあるすべての国々の代表者がいっしょになった集会を開こう。われわれの議会を開こう。諸国民の平和の運命をにぎる大問題について論じあおう」というあいさつをもって始まり、国際労働者協会の名称と宣言、そして規約の採択をなしきった。

その規約前文は大意、次のように述べている。「労働者階級の解放は労働者階級自身がたたかいとらねばならないこと。生産手段の独占者への労働者の経済的隸属が、すべての隸属、悲惨、退化の根底にあること。ゆえに労働者階級の経済的解放が大目的であって、政治的運動はこの目的実現の手段であること。今日までの労働者解放の努力は、各國労働者間の、各労働部門間の連帯と各國労働者階級間の結合がなかつたがゆえに失敗してきたこと。労働の解放は一民族の問題ではなく、近代社会の存在するあら

大戦とともに消滅した第一インター

第一インターはその前史の運動を含め、以下のような当時の歴史的条件のもとで組織された。それはまず、一八四八年のヨーロッパ革命後の長い反動の時代のうち、西ヨーロッパにおける資本主義の急速な発展と、それに基礎づけられたブルジョアジーとプロレタリアートによるヨーロッパ諸民族の独立革命闘争の高揚であった。イギリス、ついでドイツ、アメリカでの労働組合の結成とその運動の発展、一八五七年の大恐慌とヨーロッパ、アメリカでの一八六〇～六二

ゆる国々を包括する問題であり、各國労働運動の高揚は、いままおばらばらな運動をただちに結合するよう要求していること…。

第一インターは、ブルジョアジーの繁栄と勝利の時代、産業資本主義の開花期から独占資本主義への過渡期の時代、ブルジョア民主主義運動の時代、ブルジョア国民運動の時代、すでに寿命を終えた絶対主義的封建制度の廃墟のうえに、発展する資本主義が地盤を固めた時代における共産党的建設戦であったとわれわれは総括する。

たしかに第一インターの構成は、諸国の労働者の政治団体のほか、労働組合、協同組合を包含しており、けっして共産主義党的國際組織とはいえず、また各構成体（支部）とインターナショナルの組織関係も確固としたものではなく、流動的な、ルーズなものではあった。そしてまさにこの弱点ゆえに、イギリス労働組合の組合主義、ドイツ、オーストリアに残存するラサール主義、ラテン、スラブ諸国に残存するバクーニン、ブランキ、そしてブルードン主義等の分派行動を統制できず、一八七六年に消滅せざるをえなかつた。

列寧は次のように述べている。「第一インターはその歴史的な任務を終わって、世界のすべての国々の労働運動がはるかに巨大な成長をとげる時代、すなわち労働運動がその広さを増し、個々の民族国家を基礎にして大衆的な労働者がつくり出される時代に席をゆずつた」（カール・マルクス）。われわれもまた第一インターの歴史的任務を次のように確認できる。第一インターはマルクスの指導のもと、また共産主義者同盟の事業の繼承者として、あらゆる空想的社会主义に対する批判的実践的思想的・理論的指針を革命的プロレタリアートに伝え、労働運動の理論と組織に原理と原則を打ち込み、訓練をつんだマルクス主義者を育成し、各国に派遣し、世界のプロレタリアートの国際主義への希求と努力に実際的な質と形をもつて回答を与えた。そうしてこの歴史的任務は、それから一三年のち、一八八九年七月、第一インターの創立へと引きつがれていた。

デンマーク、スウェーデン、ノルウェーにも社会主義政党が誕生した。また、これらとともに労働組合、協同組合も大きく発展し、一八八九年七月、パリにおける第一インター組織化の条件を形成した。一九一四年、第一次世界大戦勃発をもつて実質的には解体した第一インターについて、「第一インターナショナルは一九世紀の最後の三分の一と、二〇世紀初めのきわめて過酷な資本主義的奴隸制と、きわめて急速な資本主義的進歩の長い『平和的』な時代に、プロレタリア大衆をあらかじめ組織するための有用な準備的活動をして自分の受けもちの仕事をした」

『社会主義インタナショナルの現状と任務』)とレーニンは位置づけている。

たしかに第一インターの活躍した時代が革命的情勢の時代であり、第一インターは主として革命に対する原則的態度をマルクス主義にもとづいてプロレタリアートの前に明らかにする任務を担つたが、第二インターの時代は、帝国主義の誕生と成長期、帝国主義の相対的定期であつたがゆえに、その基本的な活動は、当時の階級闘争が直面していた具体的なプロレタリア要求の指導に集中したと言える。軍国主義反対、八時間労働制、選挙権拡大、工場法制定などの諸要求指導、労働組合、協同組合、社会主義政党建設の指導がそれであつた。

結成当時から九五年まで、エンゲルスの指導下にあつたと言える第二インターは、前記のその主活動の特性にも根拠づけられ、第一インターの影響力が西ヨーロッパを越えることがなかつたのに比し、全ヨーロッパとアメリカの大半にまでその影響力を拡大した。しかしながら植民地諸国—インド、中国、アフリカ、大部分の

ラテン・アメリカ諸国の人民との関係はいまだ組織されることがなかつたという事実もまた注目されるべきである。

内乱をおこすために、プロレタリアートの勢力を組織するという任務に直面しているのだ』

一九一四年八月、第一インターの主力を構成していたドイツ社会民主党が、自國帝国主義政府の戦争予算に賛成投票した時をもって、プロレタリアートの世界党としての第二インターは解体したとらえられるべきであるが、帝国主義の時代に帝国主義国内に発生する特殊な民族主義—帝国主義的民族主義、排外主義、労働貴族の発生に抗する思想的・理論的、そして政治的な未武装以外に、第一インターにはもう一つの弱点があつたことが総括されるべきである。

それは組織的な組合主義ともいいくべき弱点であつた。第一インターは大会から大会までのあいだ、実際的指導を担う中央組織を、創立大会から後に至るまでもちえなかつた。第二インターは、二年ものあいだ、世界的な司令部も、国際的機関紙も、正規の規約も、はつきりした政治綱領も、決定を実行せしめる規律ももちえなかつたという事実がそれを示していると言える。

主義を民族主義とすりかえよう試みている。彼らはこれらの国の労働者党に政府の犯罪行動と対決せず、労働者階級の立場を帝國主義政府の立場に融合させるよう呼びかけた。インタナシヨナルの指導者たちは、軍事公債に賛成投票し、交戦国のブルジョア内閣に入り、社会主義を裏切つたと第一インター指導者を批判し、「第二インターの崩壊は、過ぎ去つた『平和的』な時代の特殊性を基盤として育成され、近年インタナシヨナル内で事実上の支配権を得ていた

そのうえでレーニンは、創出されねばならぬ第三インターの必要性について、「すべての先進国では、戦争が社会主義革命のスローガンを日程にのぼせている」と情勢を規定し、「危機の時代には非合法形態の組織と扇動がぜひとも必要だ」「日和見主義者は自分の信念を裏切るという代価を払つて合法組織を守るがよい。革命的社會民主主義者は社会主義のための危機の時代にふさわしい非合法闘争形態をつくりだすために、すべての国の労働者と結合するためには、労働者階級の熟達した組織能力と組織上のつながりを利用する」(同前)と、その組織の性格を展望した。

レーニンにあって一九一九年に成立した第三インターの展望は、一九一四年、第一次大戦の当初にあつてすでにかかげられていた。「プロレタリア・インタナシヨナルはほろびなかつたし、またほろびはしないであろう。労働者大衆はあらゆる障害をのりこえて新しいインタナシヨナルをつくりだすであろう」(同前)。「第三インタナシヨナルは資本家政府を革命的に襲撃す

るため、政治権力をめざし、社会主義の勝利をめざし、あらゆる国のブルジョアジーに対して内乱をおこすために、プロレタリアートの勢力を組織するという任務に直面しているのだ』

『社会主義インタナシヨナルの現状と任務』)。

帝國主義戦争下、社会排外主義との党派闘争を通してその骨格をつくりあげたレーニンによると第三インター展望は、一九一七年ロシア革命で誕生した。共産主義インタナシヨナルー第三インターは、第一インターがプロレタリア階級闘争の未来の発展と進路に関する原理と原則をプロレタリアートに提起し、第一インターが労働組合と協同組合、社会主義党建設のため区別され、共産主義諸党の統合司令部、革命の情報・支援の公然たるセンターであったのと

第三インターは、ボルシェビキ党によるロシア社会主義革命の成功を権威の背景とし、ヨーロッパ革命の接近を情勢分析の基底にえた世界革命のための世界党であった。

一国の社会主義革命の勝利は、資本主義の打倒、社会主義の要求をかかげたプロレタリアートとの前衛党による政治権力の奪取を意味し、少なくとも世界の主要な資本主義国との社会主義革命の勝利と結合することによって社会主義社会建設は前進し、全世界の諸民族の合流による社会主義世界の実現をもつて社会主義は勝利するというマルクス主義の見地は、ロシア一国革命の指導と第三インター指導の根幹をなぎるレーニンの見地であった。

この一国革命と世界革命の不可分離のレーニンの見地は、当時のヨーロッパの革命的危機の強まりのなかで、ひとりボルシェビキ党のみならず、他国の中産階級もその党の一一致した「ヨーロッパ革命の接近」なる情勢認識により強化されて第三インターの任務と組織を規定したとわれわれはみる。一九二〇年八月四日、コモンウェルス第二回大会で採決された共産主義インターナシヨナルの規約、八月六日、同じく承認された共産主義インターナシヨナルへの二二カ条の加入条件は、まさしくこの見地にもとづいてつくられ、この理論的・政治的見地の組織的表現であった。

規約は次のように第三インターを組織づけている。「共産主義インタナシヨナルの目的は、国際ブルジョアジーの打倒と、国家の完全な廢止への過渡的段階としての国際ソビエト共和国を創立するために、武装闘争を含む一切の有効な手段によってたたかうことである。」労働者の解放は、地方的なものでも、また一国限りのものでもなく、国際的な問題である。共産主義インターナシヨナルの任務は全世界の働く人々を解放することであり、すべてのソビエト共和国をそれがどこに組織されようとも支持する責任を負う。・共産主義インタナシヨナルは、事實

一九一五年、ツインメルワルド国際会議、一六年、キンタール国際会議が、ちゅうちよし、否決をくり返すなかで、第三インター設立に関するレーニンの見地はさらに鮮明になった。レーニンは「第二インターの大多数の指導者は、世界史的にもっとも重要なこの時機に社会

においても、行動のうえでも、全世界の单一政党でなければならない」(規約前文より)。

「共産主義インタナショナルは…社会主義を実現するであろうところのプロレタリア独裁と国際ソビエト共和国の樹立を追求する各国のプロレタリアートの共同行動を組織するために樹立された(第一条)。加入するすべての党は共産主義インタナショナル〇〇支部の名を冠する(第三条)。執行委員会は共産主義インタナショナルの全事業を指導し…加盟のすべての党、および組織を拘束する指令を発する。…執行委員会は加盟する各党に対して、インタナショナルの規律に反した個人、あるいはグループの除名を要求する権利を有する。それはまた、大会の諸決定をおかした党をインタナショナルから除名する権利を有する(第九条)。加盟する個々を要求する権利を有する。それはまた、大会の諸決定をおかした党をインタナショナルから除名する権利を有する(第九条)。加盟する個々



コミニンテルン第2回大会のさい、東方諸民族の代表と話し合うレーニン

の党と党とのあいだの政治的連絡は執行委員会を通じて行われる(第一三條)」。

二一カ条の加入条件は、レーニンによって起草されたものであるが、レーニンは前記規約の再確認に加えて、次の事項を加入条件につけ加えている。労働組合等の責任ある地位からの改良主義者・中間分子の追放と共産主義者の送り込み(第一条)、非合法組織創設の義務(第三条)、農村における扇動活動(第四条)、改良主義と中間派の政策と完全に手を切ること(第七条)、植民地における一切の植民地解放運動を行動をもって支持すること(第八条)、中央集権制党組織(第二十二条)、小ブル分子排除のための定期的な党員の再登録(第一三條)、すべてのソビエト共和国を無条件に支持すること(第一四条)、各党綱領は大会、あるいは執行委員会の承認を要する(第一五条)、執行委員会およびその決定はすべての党を拘束する(第一六条)。

一九一四年七月二八日に勃発し、一八年一一月一日に終了した第一次大戦下に発生した革

命的危機、および敗戦国に発生した革命的危機は、ハンガリーア革命、バイエルン革命にみられるごとく、また何よりもロシア社会主義革命政権の誕生と二年まで続いた反ソビエト戦争に現実化した、帝国主義戦争を内乱へ、そして世界革命戦争へと発展する世界革命の可能性を示唆するものであった。それはロシア革命をヨーロッパ主義の勝利に転化しようとするとする可能性の戦略的追求へと具体化した。二一年二月、イタリア社会党からのイタリア共産党的分裂、同三月、ドイツ・マンスフェルト等での武装蜂起、一二三

年一〇月、ドイツ・ザクセンにおける社会主義政府成立と武装蜂起等は、その大筋においてコミニンテルンのこの戦略的追求の結果とみることができる。

第三インターを歴史のなかに静止した地平とみてはならない。そうではなく、第二インターがその時代における歴史的任務をもったと同じく、帝国主義戦争の生み出す革命的危機を、世界革命へとたどりに転化させ、これを勝利に導く戦略に基づいた世界革命の司令部としての世界党であつた。

レーニンは何に逢着したのか

一九二〇年一〇月、ワルシャワを眼前にして赤軍の敗北と強いられた休戦は、ヨーロッパ革命の遠のきを告げるものであった。この歴史的情勢の変化は、理論上は、一国における社会主义革命の成否に関する新たな課題、革命的実践上は一国革命と世界革命の長大な時間差を克服する新たな世界党の課題をつき出すものであった。それはまず、すぐれて実践的課題として現れた。一七年革命政権の誕生は、その後三カ年にわたる内戦と、帝国主義諸列強の反革命干渉戦を生み出したが、その過程は、革命政権の存亡をかけての「プロレタリア第一段階」であり、その政策は、戦時プロレタリア独裁による「戦時共産主義」であった。自由商業の禁止、食料の徴収制、強制労働制、全工業の国有化の断行などを主国内政策とした戦時共産主義は、ロシア对外政策を完全に第三インター路線に結合する世界革命戦争を遂行するための国家政策であつたといえる。

ヨーロッパ革命の遠のきのさしさは、まず戦時共産主義の中止とネップ政策の導入に具体化したといえる。もちろんのこと、農民の不満と反抗の増大への対応策という動因は存在し、一九二〇年、ボーランドによる反革命侵攻に触発された国民の愛国心の高揚にみられるごとく、ソビエト政権がもはや確固たる成長をとげたという権力の土台に支えられたものとはいえ、ネップ導入の歴史的性格は、世界革命の遠のきのなかで、はじめて共産主義者の課題となり始めた

「先に革命権力を奪取した一国の延命」という新課題への一つの面からの実践的回答であったととらえられねばならない。

戦時共産主義政策下での食料徴収制度に代わ

西欧革命の不発とロシア外交の転換

ヨーロッパ革命の遠のきのさしさは、まず戦時共産主義の中止とネップ政策の導入に具体化したといえる。もちろんのこと、農民の不満と反抗の増大への対応策という動因は存在し、一九二〇年、ボーランドによる反革命侵攻に触発された国民の愛国心の高揚にみられるごとく、ソビエト政権がもはや確固たる成長をとげたといいう権力の土台に支えられたものとはいえ、ネップ導入の歴史的性格は、世界革命の遠のきのなかで、はじめて共産主義者の課題となり始めた

「先に革命権力を奪取した一国の延命」という新課題への一つの面からの実践的回答であったととらえられねばならない。

レーニンはこの「政策」に関して次のように

説明している。「われわれがロシアの反革命のくわだてをみんな粉碎し、西欧のあらゆる国々と正式の講和締結をかちとった事情を一べつするなら、われわれが息つきを獲得しただけではなく、資本主義諸国の網の目のなかで、われわれの基本的な国際的存立をかちとった新しい一時期を獲得していることが明らかとなるであろう」「まさにこの帝国主義的利害の相違をわれわれはたえず利用してきた。われわれが干渉にうちかったのは、ただ彼ら自身の利害が彼らを分裂させたからにはほかならない。われわれはそれによって息つきを確保した」(『わが国の内外情勢と党的任務』)。「もし利権についての一月二三日の法令を注意深く読むなら…われわれが世界経済の意義を強調していること、そして故意にそうしていることに気づくであろう。これには議論の余地のない正しい見地である」(『ロシア共産党モスクワ組織の活動分子の会合での演説』)。

ここではまだ、この政策を不可避とする一国革命の世界革命への合流と結合に關するレーニンの新しい展望は明確ではない。事実、この激動の余じんくする時代にあって、ボルシェビキ党のみならず、第三インターそのものも、世

界情勢の流動のなかで、世界革命の接近に関する期待と絶望の揺れ動きのなかにあった。しかし事態は進行した。単に經濟的對外政策、國內政策の新路線にとどまらず、ソビエト政權の外交政策の「転換」へとそれはつき進んだ。ネップを決定した一〇回大会の一週間後、長期にわたり交渉されてきた英ソ通商協定が締結されたが、協定の前提条件には、双方の敵対行動をつつしみ、双方の制度に関する公式の批判宣伝をつしみ、ソビエトはアジア、とくにインドおよびアフガニスタンにおける反英闘争を助長しないこと、などが規定されていた。さらに一九二一年初めには、ソビエト・アフガニスタン条約、ソビエト・ペルシャ条約が締結され、ソビエト政權の基本政策であったアフガニスタン、ペルシャ内の共産党への支援と連帶のいくぶんかを犠牲にし弱め、反英・反植民地主義ではあるが民族主義であり、ブルジョアジーと地主階級に指導された国家との関係を公式にもつことを意味していた。

この外交に新しく導入された政策の性格は、一九二一年三月に締結されたロシア・トルコ条約においてきわめて鮮明に、もう一つの性格といふのが民族主義であり、ブルジョアジーと地主階級に指導された国家との関係を公式にもつことを意味していた。

この外交に新しく導入された政策の性格は、ソビエト政權のもの、その直接の指導責任を負うロシア共産党そのものから始まったこの「転換」が、第三インターの方針の転換に現れるのは、その後からであった。

当時、おおよそ、戦術的局面に規定された戦術的転換と理解されていたこの「転換」は、決してそうではなかった。インターからではなく、ソビエト政權のもの、その直接の指導責任を負うロシア共産党そのものから始まったこの「転換」が、第三インターの方針の転換に現れるのは、その後からであった。

コミニテルン内の二つの大きな論争

「転換」のインターへの波及は、インターが内包していた二つの論争を新しく浮上せしめたと言える。一つは、すでに一九二〇年八月に決定されたインター規約と加入条件の採択をめぐつて現れていた論争である。そして第二は、一九二一年一二月一八日、インター執行委員会の指令による統一戦線戦術から始まる論争である。そしてそれは同根のインターの逢着問題の噴出であった。

前者の論争—規約と加入条件についての論争は、ロシアの経験の普遍化とロシア共産党の主導権をめぐって発生した。一九二一年のコミニテルン第三回大会では、代表の一人バインコープが「第八条は国際的な執行委員会でなく、ロシアの執行委員会のことを意味している」と批判し、アメリカの代表は労働組合の自主性をあまりにもせばめる第一四条に異議を申し立てた。加入条件に関しては、ドイツ独立社会民主党の代表が、激しくこの二一ヵ条総体に反対し、「ここでもまた独裁の問題の場合と同様、特殊なロシア的形態が全国際プロレタリアートの原則にまで高められている。内容が形態によって窒息させられている。そしてこれが革命のコストをいつそう困難にする。というのは異なるた

いらしいからである」と主張した(『コミニテルン・ドキュメント』)。

レーニンはこれらに關し、一二年一月、コミニテルン第四回大会で、「第三回大会でわれわれは、共産党の組織的構成、活動の方法と内容に関する決議を採択した。この決議はすばらしいものである。だがそれはほとんど一貫してロシア的である。つまりすべてがロシアの経験からとられている」「私は、われわれがこの決議で大きな誤りを犯したという印象、つまり、われわれが自分で今後の成功への道を断つてしまたという印象を受けた」(『ロシア革命の五カ年と世界革命の展望』コミニテルン第四回大会での報告)と述べている。この発言の前にレーニンは次のような発言もしている。「われわれは、あるいは退却することになるかも知れないという問題と、この退却を保障するという問題をほとんどまったく熟考してみなかった」「退却の可能性にも備えなければならぬ」という考えが重要な意味をもつのは單に理論的な見地からばかりではないと思う」(同前)。当時のレーニンにとって、退却と退却の保障は、レーニンによれば、社会主義経済への回り道としての特殊な国家資本主義、管制高地を握ったうえでの国家資本主義であった。

第四回大会における規約、加入条件に関するレーニンの変化を、われわれは彼自身の報告が示すように、「規約」と「加入条件」をただちの世界革命の司令部としての世界唯一の組織的表現とせしめていた。インターの基本任務そのものの変化を思考するレーニンの問題意識の

結合した。トルコからの民族独立闘争をたたかい、民族主義者と社会主義者の連合による民族独立国家成立寸前の状態にあったアルメニアに關し、それを阻止しようとするトルコと、反社会主義の民族國家の出現を恐れるソビエト・ロシアは、アルメニア領土の大幅な割譲をトルコに認めたトルコ・アルメニア講和条約(一二〇年一二月二日)、社会主義者支配地域をもつての小さなアルメニア社会主義共和国をソビエト・ロシアが承認したロシア・アルメニア条約(同日)をそれぞれ結んだ。トルコに対するこうした大きな妥協を通じて、ソビエト・ロシアはトルコを味方に引きつけようとしたのである。

レーニンは、レーニン自身が当初要求したような世界党の決定による各支部の実践の「転換」ではなかった。

当時、おおよそ、戦術的局面に規定された戦術的転換と理解されていたこの「転換」は、決してそうではなかった。インターからではなく、ソビエト政權のもの、その直接の指導責任を負うロシア共産党そのものから始まったこの「転換」が、第三インターの方針の転換に現れるのは、その後からであった。

反映とみる。「退却の可能性の保障」は、このわれわれの見地から、レーニンにあってはただ「特殊な国家資本主義と管制高地」のみではない。「プロレタリア権力とソビエト共和国の存続」がその前提につけ加えられねばならない。レーニンは、一九二〇年一月の『わが国内の内外情勢と党的任務』のなかで次のように言っている。「われわれは今や、われわれの予言がどういう点ではずれ、どういう点で的中したかを知っている。この問題(注・ロシアの社会主義化とその条件としてのヨーロッパ革命)の急速な簡単な解決が得られなかつたという点で、これららの予言ははずれた」「結局、どちらの側も、ソビエト・ロシア共和国も、その他の資本主義世界全体も、勝利も敗北もしなかつたことがわかり…しかし、主要なもの…たとえ全世界にわたる社会主義革命が長びく場合でも、プロレタリア権力とソビエト共和国の存続の可能性を維持するということがわかつた」と。

レーニンにあって、ロシア一〇月蜂起がロシアにおける社会主義革命の開始であるという見地は不動のものであった。同じようにレーニンにあって、ロシア社会主義革命は、当時の資本主義世界であつたといえるヨーロッパ社会主義革命と統合されることのない限り、社会主義の勝利―社会主義社会の実現に到達しえないという学理もまた不動のものであった。われわれは完全にこの見地、マルクス、レーニンの見地に一致する。この見地にもとづきレーニンとボルシェビキ党は、革命ロシアをヨーロッパ革命の利益に従属させ、ヨーロッパ革命―世界革命の

司令部へと第三インターを編成し、かつ実働せしめた。

ヨーロッパ革命の可能性の遠のきは以上みてきたように、共産主義者にとって、先に革命を実現した一国と、世界革命実現のあいだの、この長大な時間の差のなかで、いかにして持久し、敵と対峙していくべきなのかという大きな、そして現実的な課題をつつけた。この現代共産主義者にまで引きつがれる課題への攻撃は、まず一九一八年八月、カウツキーによってなされた。「ボルシェビキ革命は、それがヨーロッパ全体の革命への引き金として作用し…ヨーロッパ・プロレタリアートの決起を鼓舞するだろう」という仮説にもとづいていた。もし、その仮説が実現するなら、万事合理的であり、学問的に証明される。しかし、もしそうでなかつたら

第三インターの再建めざそ

ロシア共産党の路線の転換は、戦術の転換といふ不十分な認識ではあつたが、一九二一年一二月、コミニンテルン第四回大会で提起された統一戦線戦術をめぐってインターナショナルの課題となつた。ジノビエフはこのテーマを発表した執行委員会で次のように述べている。「大戦と大戦直後の闘争とにより、労働者階級は疲れ、無氣力の状態をつづけている。彼らは労働者の敗北を不統一によるものだと考えており、統一戦線戦術をうちだせば彼らの支持を受けることができよう」「もし一九二〇年に赤軍がワルシャワを占領していたら現在の共産主義インターナショナルの戦術はちがつていただろう。」戦略的退却につづいて、労働者運動全体のための政治的退却が行われた。ロシアのプロレタリア党はやむを得ず広範な讓歩をせねばならなかつた。このことがプロレタリアートが行つた退却が、最初のプロレタリア国家の政策に影響を及ぼし、ロシアにおけるテンポを遅らせた。そして「統一戦線戦術は、じつは…決定的闘争の時が、まだ日程にのぼっていないからである」としめくつてている。さらにドイツ共産党的マイエルは、「ソビエト・ロシアの新コースと、第三回大会以降の共産主義インターナショナルの新戦術はきわめて密接な関係がある。この両者はともに國際情勢における変化の結果である」(以上『コモンテルン・ドキュメント』より)。

ここではロシアと第三インターの「転換」の必要性が率直に認められている。またこの情勢変化に対応した「戦術上の転換」に基本的な認識のちがいを表明した党はなかつた。フランス共産党、イタリア共産党、スペイン共産党の反

ばどうなるのか。今のところそうなつていないのである」(『コミニンテルンの歴史』より)。カウツキーの理論の体系を背景にみると、それは社会主義革命は最大の資本主義国のみに発生する社会現象であり、改良された資本主義国ではそれはもはや革命的手段を要しない改造の問題になる—という平和革命論である。この攻撃は今日までつづくブチ・ブルジョアジーの攻撃として存在している。レーニンの残した課題への第二の攻撃は、スターリンによる一国社会主義論である。われわれは次に、スターリンによる一国社会主義論を、このレーニンとボルシェビキ党、そして第三インターの逢着課題から転落、その放棄という視点から批判し、そうすることによって、第三インターの逢着課題を鮮明にしようとする。

現代にまでつづく 革命の大きな課題

対の主意は、今まで社会民主主義者を最悪の敵と宣伝してきたことの突然の変更がもたらす組織内の混乱を述べたにすぎないものであつた。

現代にまでつづく

第一インターの報告

第一インターの歴史的任務が、マルクス主義の伝導装置、科学的社会主义をもつて労働運動に原理と原則を与えることにより、第一インターのそれが、広範な労働運動の育成と結集にあたとするなら、第三インターの歴史的任務は、ヨーロッパ革命的司令部、ヨーロッパ・プロレタリア社会主義革命の単一の世界党の建設にあつた。この任務はレーニンによつて断固として、徹底的に執行された。

この第三インターはヨーロッパ革命の遠のきという全般情勢のなかで、現代プロレタリアートにまで引きつがれる二つの大きな社会主義革命の課題に逢着した。その一つは、一国のプロレタリア革命は、いかにして世界革命にまで延伸し、社会主義を実現するのかという課題であり、他の一つは、植民地・半植民地国の人々の革命は、いかにして社会主義革命に転化しうるのかという課題である。すでに述べてきたように、レーニンはこの二つの課題に逢着したことを見知り、この二つの課題のもとに第三インターが編成され、この二つの課題を第三インターの任務にしなければならないことを自覚していた。

周知のようにスターリンは、このロシア社会主義革命と第三インターの逢着課題を「一国社会主義建設可能論」をもつて葬り去り、マルクス主義を捨て去り、今日のソ連邦とソ連共産党の破産の基礎原因をつくつた。

一九二四年までにはコミニンテルンは、世界資本主義は安定化の新しい局面に入り、近い未来に世界的な革命的情勢が到来することは期待できない、という情勢認識を受け入れていた。そしてだけでなく、抑圧された民族の代表者としてだけなく、抑圧された民族の代表者としても行動している。共産主義インターナショナルは東方諸民族のために『万国のプロレタリ

アと被抑圧諸民族、団結せよ!』というスローガンを出した。…もちろん『共産宣言』の見地からいえばこれは正しくないが、『共産宣言』はまったくちがつた条件のもとで書かれたのであって、現在の政治という見地からいえば、これは正しいのである』(『ロシア共産党モスクワ組織の活動分子の会合での演説』)。

このレーニンの新しい可能性と課題、したがつて第三インターの課題は、次の見地にいきつき、そして終わっている。「世界革命のきたるべき決定的な戦闘では、はじめは民族解放をめざす地域住民の大多数の運動が、資本主義と帝国主義に鋒先を向け、おそらくわれわれが期待しているよりずっと大きな革命的役割を演じるであろうことはまったく明らかである。われわれがはじめてこの闘争の準備にとりくんだことを強調するのは重要である。」植民地の労働大衆、農民は、いまなお遅れているにもかかわらず、世界革命の今後の局面では、きわめて大きな革命的役割を演じるであろう」(『共産主義インターナショナル第三回大会—ロシア共産党の戦術についての報告』)。

アと被抑圧諸民族、団結せよ!』というスローガンを出した。…もちろん『共産宣言』の見地からいえばこれは正しくないが、『共産宣言』はまったくちがつた条件のもとで書かれたのであって、現在の政治という見地からいえば、これは正しいのである』(『ロシア共産党モスクワ組織の活動分子の会合での演説』)。

なには、鉄のボルシェビキ党の「信念と努力も、その理想を実現することはできないのか!」という疑問が発生した。「もし、ロシア一国で社会主義が建設されないとするなら、一〇月革命を起こす必要はなかった。一国で社会主義を建設するという可能性を否定するものは必ず一〇月革命の正当性をも否定しなければならない」(大意)といふ、一九二五年五月、第一四回大会モスクワ支部への報告で始まるスターリンの一国社会主義論は、歴史的逢着課題そのものの否定的回答であり、世界党的必要性そのものを否定するものであった。一国社会主義路線は、世界党をロシアへの奉仕機関に変質させ、ロシア防衛の戦術的手段に転落させ、第二次大戦における世界帝国主義の危機を革命的危機に転化させる任務を世界党に放棄させ、これを解散せしめる路線であった。

毛沢東主義による実践的突破の試み

コミニンテルンの逢着した課題への実践的回答は毛沢東に主導された中国革命において開始された。それは、資本主義国におけるプロレタリアートによる社会主義革命ではなく、半封建・半植民地国における、労働者・農民・民族ブルジョアジーによる反封建・反帝闘争を、いかにして社会主義革命へと転化するのかという実践であった。毛沢東と中国革命は大意次のようにこの問題を解決しようとした。

中国は社会主義プロレタリア革命の前提条件であるブルジョア民主主義、および資本主義による工業の発展を欠いている。またプロレタリアートが質量とも未発達なため、第一の革命は新民主主義革命である。新民主主義革命は、プロレタリアートと農民、民族ブルジョアジーの連合により帝国主義と大地主の支配を打倒し、反帝・反植民地・反封建の人民民主主義政権をうちたてる政治革命である。この人民民主主義権力をプロレタリアートが主導し、プロレタリア独裁と社会主義経済へと転化・発展させるとともに、社会主義の勝利に向けて継続革命が組織されねばならない…。

これは、レーニンの時代には存在しなかった新しい社会主義革命論である。そして今日、地球上の過半の人民が、第三世界といわれる半封建・半植民地国の人々によって占められており、逢着課題に対する真正面からの実践上の回答であるということができる。

この毛沢東による新民主主義革命路線は、異なる立場から、陳独秀とトロツキーによって激しく非難された。陳独秀にとっては、中国のようない状態の国にあっては、ブルジョア民主主義

的国民革命→ブルジョア革命→資本主義の発展→資本主義国家成立→プロレタリア革命という歴史発展の段階をふむ以外に社会主義を展望することは不可能であった。

トロツキーにあっては国共合作、民族ブルジョアジーと労働者階級の反帝統一戦線は受け入れることのできないものであった。このことの政治戦術上の評価は別にゆずるとして、その背景にあるのは、帝国主義と民族ブルジョアジーの矛盾の過少評価、残存する封建的諸関係の過少評価、民族運動の過少評価、あるいはこれを民族ブルジョアジー固有の運動と見る誤りであり、政治的には反帝民族解放闘争と農民の土地革命を社会主義プロレタリア革命から切断する思想である。このトロツキズムの誤りは今日の、たとえばフィリピン革命に対する第四インターの破壊的対応にまで発展しているものである。

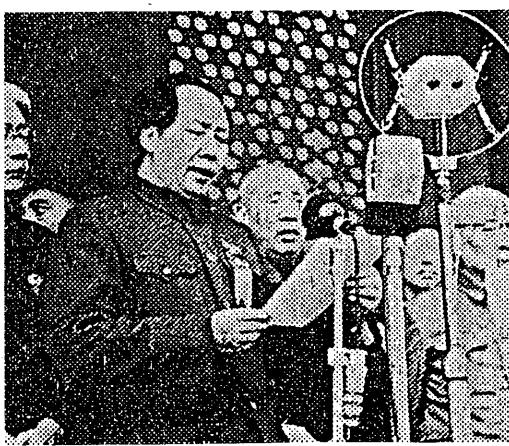
レーニン第三インターの逢着課題に回答する責務をもつ現代プロレタリアートに對して、たしかに毛沢東中国革命路線は、そのいく割かの回答を実践的に明らかにしたとわれわれはみると、またみなればならない。しかし、そうであるならば少なくとも一九六六年八期一一中全会によつて公式に発令された文化大革命の敗北と、鄧小平による中国の資本主義化が総括されねばならない。全世界の多くの毛沢東派、あるいは「マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の擁護」をとなえる人々が言うように、それは現代修正主義者のしわざ、鄧小平の裏切りの発生によるものという説明ではあまりに不十分であるばかりでなく、むしろ歴史的課題の追究の事業にとって反動的でさえある。

一九五六年九月に開催された中国共産党第八回大会は、中国の人民政権は人民民主主義権力の時代を終わり、すでにプロレタリア独裁となつていると規定した。そして社会主義革命の基本的方向づけた。総括的に、社会主義建設を生産關係の変革・社会主義的改造に限定して、その和平的移行を中国の社会主義革命の特徴であると主張した。

毛沢東は一九五七～八年にかけ、この八回大会への彼の指導見地を転換し、すでに発生していたフルシチヨフによる「修正主義」への警戒をも加味し、社会主義革命はいまだ継続していること、経済建設は政治革命に従属しなければならないこと、大衆運動と軍がその継続革命の先頭に立つべきことを主張し始めた。

この毛沢東の見地は、一九六二年八期一〇中全会、中ソ論争をふまえ、「プロレタリア革命とプロレタリア独裁の全期間にあつては、資本主義から共産主義に移行する歴史的な全期間（この期間は数十年、あるいはさらに多くの時間が必要とする）にあつては、プロレタリアートとブルジョアジーのあいだの階級闘争が存在

し、社会主義と資本主義との闘争が存在する」との決定に発展した。



建国宣言を読みあげる毛沢東(1949年10月)

から始まり、共産主義社会建設の物質的条件で

他一つは、毛沢東の継続革命論の方法論とも言うべき運動の弁証法（矛盾論）のもつ機械論的誤りであると指摘する。この毛沢東思想の弱點は、文化大革命の敗北・文化大革命が社会主義のための継続革命から外れ、党的指導の實質的な不在、眞にたたかうべき敵を見失った無政府的奪権闘争への転落をもたらしたとわれわれは総括する。

社会主義革命はプロレタリア独裁権力の樹立をもたらし、社会主義革命はいまだ継続していること、経済建設は政治革命に従属しなければならないこと、大衆運動と軍がその継続革命の先頭に立つべきことを主張し始めた。

この毛沢東の見地は、一九六二年八期一〇中全会、中ソ論争をふまえ、「プロレタリア革命とプロレタリア独裁の全期間にあつては、資本主義から共産主義に移行する歴史的な全期間（この期間は数十年、あるいはさらに多くの時間が必要とする）にあつては、プロレタリアー

■コミニテルン関連年表

1847	(6)共産主義者同盟創立 (52・11解散)
1864	(9)第1インター創立 (76・7解散)
1871	(3)パリ・コミューン
1883	(3)マルクス死去
1889	(7)第2インター創立
1895	(8)エングルス死去
1914	(7)第1次世界大戦始まる (~18・11) (8)独・仏など社会民主諸党、軍事予算に賛成投票 (1)レーニン、新しいインターの創設を呼びかける
1915	(9)ツィンメルワルドで第1回国際会議
1916	(4)キーンタールで第2回国際会議
1917	(1)ロシアで社会主義革命
1918	(3)ブレスト講和条約調印
1919	(2)改良主義者等ベルン・インター創設 (~23・5) (3)第3インター (コミニテルン) 創立 (7)改良主義労組がアムステルダム・インターを創設 (10)共産主義青年インター・ナショナル創立
1920	(7)コミニテルン第2回大会 (規約・加入条件) (8)赤軍のワルシャワ進撃敗北 (9)第1回東方諸民族大会 (32の民族の代表が参加) (2)第2半インター創立 (~23・5)
1921	(3)ネップ (新経済政策) 始まる (6)コミニテルン第3回大会 (7)赤色労働組合インター (プロフィンテルン) 創立
1922	(4)コミニテルン第3回大会 (統一戦線戦術)
1923	(5)第2、第2半インターが社会主義インターを創設
1924	(1)レーニン死去 (6)コミニテルン第5回大会 (党的ボルシェビキ化) (7)コミニテルン第6回大会 (コミニテルン綱領)
1928	(1)ドイツでナチスが政権を掌握
1933	(7)コミニテルン第7回大会 (反ファシズム統一戦線)
1935	(9)第2次世界大戦始まる (~45・8)
1939	(5)コミニテルン解散
1943	(9)コミニテルン解体 (57・4解散)
1947	(10)中国革命の勝利
1949	(8)中国で文化大革命始まる (~76・10)

ある社会主義世界実現までの全過程である。したがって社会主義革命は社会主義世界の建設であり、全世界においてブルジョアジーが打倒され、世界プロレタリア独裁＝プロレタリア民主主義が樹立されることによって、生産手段の私有制が廃止され、社会的所有に帰し、全世界において搾取が廃止され、分配の平等を実現するプロレタリアートの事業である。こうした社会主義世界を物質的条件にして、あらゆる階級差異がなくなり、商品・貨幣関係がなくなり、精神労働と肉体労働の対立がなくなり、国家が必要がなくなり、生活資材の争奪の根拠がなくなり、労働が生活の第一の喜び、人はその能力に応じて働き、必要に応じて得ることができる。共産主義世界の建設を開始することができる。

共産主義社会は全人類を包含するもの以外に想定しえないものであるがゆえに、その物質的条件である社会主義社会は社会主義世界でなければならず、一国の社会主義建設の完了は、世界革命の勝利によってのみ実現する。

継続革命論がその革命目的の社会主義指標をあいまいにするがゆえに、現代世界の第三世界革命は、その不可避といえる新民主主義革命段階の目的を混乱させ、ブルジョアジーと市民にその成果をさんざん奪っていく危険を生じさせているといえる。この弱点はさらに国際的な労働者人民による第三世界革命支援の混乱をも生み出し、彼ら自身の支援・連帯活動を通しての階級形成の混乱をもたらしているのもまた現実の問題である。

他の一つ、毛沢東の矛盾論のもつ機械論的弱点について、典型的には次のような誤りが指摘されねばならない。毛沢東はこう論じている。「いっそう重要なことは、矛盾している事物が相互に転化しあうことにある。つまり、事物の内部の矛盾する両側面は、一定の条件によって、それぞれ自らと反対の側面へ転化していくのである。」見たまえ。被支配者であったプロレタリアートは革命を通じて支配者に転化し、もと支配者であったブルジョアジーは転

ある社会主義世界実現までの全過程である。したがって社会主義革命は社会主義世界の建設であり、全世界においてブルジョアジーが打倒され、世界プロレタリア独裁＝プロレタリア民主主義が樹立されることによって、生産手段の私有制が廃止され、社会的所有に帰し、全世界において搾取が廃止され、分配の平等を実現するプロレタリアートの事業である。こうした社会主義世界を物質的条件にして、あらゆる階級差異がなくなり、商品・貨幣関係がなくなり、精神労働と肉体労働の対立がなくなり、国家が必要がなくなり、生活資材の争奪の根拠がなくなり、労働が生活の第一の喜び、人はその能力に応じて働き、必要に応じて得ることができる。共産主義世界の建設を開始することができる。

化して被支配者になり、相手が互いにもと占めた地位に転化していく」(『矛盾論』)。

これは誤っている。弁証法上の矛盾とは対立関係一般を言うのではなく、対立関係の運動のなかからその対立を止揚する主体へと対立物が転化していく、そのような対立を言う。引用文を例にとれば、プロレタリアートはブルジョアジーへの対立運動を通してブルジョアジーをブルジョアジーでなくしていくのであり、さらには、その対立運動の発展のなかでプロレタリアー

共産主義者同盟の党建設に結集せよ

すべての革命的プロレタリアート、すべての同志へ。一九九四年、われわれはわれわれ自身の手によって共産党の国際会議を組織するのみならず、他国で開かれる国際共産党会議に参加する。その時、日本のプロレタリアートは、どのような立場で、何をかかげてその国際主義的責務を果たすべきなのか。

第一に指摘されるべきは、これらすべての会議が、あらゆる意味においてインターナショナルへの自己武装を直接の任務にしていないことである。九三六年六月、インドのカルカッタにおいて開かれた共産党国際セミナーはこの任務に關して、「今日、世界革命を導くセンターは存在しない。このようななかで相互の意見交換は大切だが、正しい総括を引き出すためにはもう少し時間が必要である。二国間、多国間で関係づくりを強化しよう」(大意)と、とりまとめている。

第一に指摘すべきは、九二年、九三年に開かれた主要な国際会議の多くの参加党にみられる毛沢東主義への悪しき逃避についてである。これは先に指摘したインター・ナショナルの建設のために必要な総括の任務に関する消極性の反映である。そしてまた、インター・ナショナルの総括、そしてこの総括の立場からソ連邦・ソ連

トは自らの階級を廃絶していくのである。この思想は、継続革命論、その一つの実践として出発した文化大革命の無政府性に、前述した弱点と重なりあって大きな責任を負っている。文化大革命の無政府性は、たたかうべき敵、実現すべき社会主義課題が党によって指示示されないという指標の欠如の結果であったのみではなかった。運動の主形態とさえなった奪権闘争の機械的戯画は、この矛盾論のもつ非弁証法の運動への適用の結果であったと言える。

共産党の破産、現中国共産党の転向を総括する立場と、その任務への消極性の反映が毛沢東主義への悪しき逃げ込みを促進している。

全世界のプロレタリアートと被抑圧人民は、今こそ国際的團結を必要としている。国際的團結は共産主義者によるインターナショナルの組織化によってはじめて力強いものにすることができ、降伏主義のそれではなく、社会主義のための團結へと武装させることができる。

われわれは次のようにその立場を明らかにする。建設されるべきインターナショナルは、レーニン第三インター再建の見地から組織される。レーニン第三インターの逢着した歴史的課題を総括し、その課題の思想的・理論的・実践的回答をなすことによって第三インターは再建される。組織される国際共産党会議はこの任務を担わねばならない。この任務を確認し、基調にしつかりとすることによって、われわれの国際共産党会議は、今日、もっとも重要な反帝統一戦線と、社会主義国支援、第三世界被抑圧人民の革命的決起への国際連帶を実際的に指導しうるものへと前進しうる。

すべての革命的プロレタリアート、国内外の同志。われわれの力はいまだ小さく、いまだ弱い。世界階級闘争、社会主義革命運動をとりまく全般情勢は、われわれに長期の持久戦を要求している。そしてそれはまた、資本主義とブルジョアジー、世界帝国主義に対して一步も後退しない対峙戦を要求している。ここに全世界プロレタリアート、被抑圧人民に対する国際共産党の社会主義革命に向けた当面の指導戦略の立場がおかかる。

九四年、わが共産主義者同盟の党建設は、「第三インター再建」「万国のプロレタリア・被抑圧人民の団結」をしっかりとふまえ、国際共産党会議の前進を担うものへと照準づけられる。われわれの党建設はこの任務をしっかりとふまえ、共産主義に武装された国際主義プロレタリアートの形成戦、反日帝・反世界帝、第三世界人民との連帯をかけた大衆的政治統一戦線の建設戦の戦場のなかから新しい前進を刻印していく。

革命的プロレタリアートは共産主義者同盟党建設に結集せよ。万国のプロレタリアート・第三世界被抑圧人民、團結せよ。